



東西学生サッカー一位対抗

関学、一方的に制勝

意外だった早大の不調



第二十三回東西学生サッカー一位対抗早大対関学の試合は二十二日小雨降る西宮球場で挙行...

関学 2-1 早大

早大 関学 2-1 早大 井上 関学 2-1 早大...

早大も五分関学陣右初のOKを得たがFWのヘッティング弱く関学ゴール攻めならず...

関学対早大戦後半、日H柴田のセンターリングに早大ゴールへ殺到する関学フォワード...



岡本純一氏

アメリカのサッカー

元京大GK 岡本氏に聞く

昭和十一年から三年間京大でシユの間に深きサッカーが広...

手をもくもくしている加州大が、一番強くてスタンフォード大がこれに次いでいる...

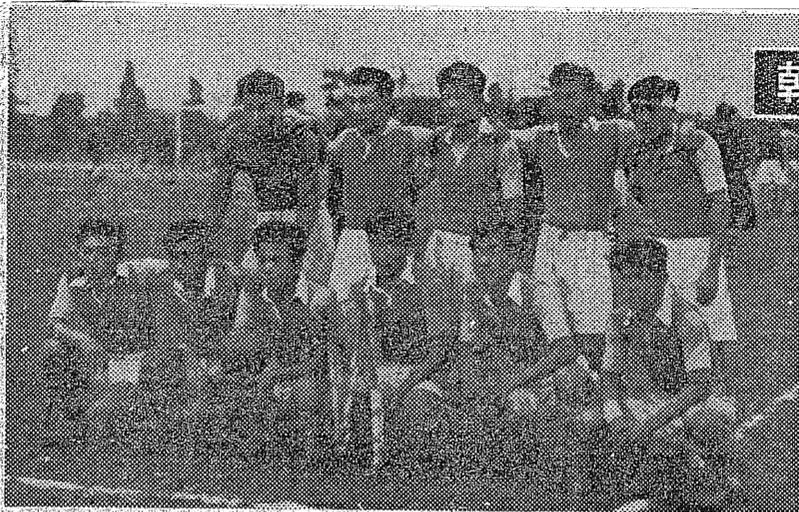
# 朝日招待サッカー

## 関学、慶応に苦戦か

### 関大や、早大に優勢

新春を飾る恒例の朝日招待サッカー大会は十二、十三の両日午後零時からの中学校模範試合に続いて同一時三十分から早大関大と慶大関学の試合を行う。

学生の手塚を擁した関学チーム



### 早大―関大

―第二日、十二日―

早大は関大リーグで再試合を行って慶大を破って一位となり、関大は関西リーグで関学に負け、順位を落とした。この試合は、早大は関大に優勢な試合となった。早大は前半から、関大の守備を破り、ゴールを奪った。関大は後半に、早大の攻撃を止めた。最終的に、早大が2-0で勝利した。

### 慶大―関学

―第二日、十三日―

この試合は、関学が優勢な試合となった。関学は前半から、慶大の守備を破り、ゴールを奪った。慶大は後半に、関学の攻撃を止めた。最終的に、関学が2-0で勝利した。

この試合は、早大が優勢な試合となった。早大は前半から、関大の守備を破り、ゴールを奪った。関大は後半に、早大の攻撃を止めた。最終的に、早大が2-0で勝利した。

この試合は、関学が優勢な試合となった。関学は前半から、慶大の守備を破り、ゴールを奪った。慶大は後半に、関学の攻撃を止めた。最終的に、関学が2-0で勝利した。

## 浦和、初優勝を飾る

### 高校サッカー均整のとれた好チーム



第三十四回高校サッカー選手権大会は、一、四、六、七日の四日間に亘り、南関東代表浦和高校が予選に勝ち、本大会に進出した。浦和高校は、予選で、三國高校と対戦し、2-0で勝利した。浦和高校は、本大会でも、三國高校と対戦し、2-0で勝利した。浦和高校は、初優勝を飾った。

浦和1	0	0	0	三國
浦和2	1	0	0	三國
浦和3	2	2	0	三國
浦和4	3	0	0	三國
浦和5	4	0	0	三國
浦和6	5	0	0	三國
浦和7	6	0	0	三國
浦和8	7	0	0	三國
浦和9	8	0	0	三國
浦和10	9	0	0	三國

浦和高校は、予選で、三國高校と対戦し、2-0で勝利した。浦和高校は、本大会でも、三國高校と対戦し、2-0で勝利した。浦和高校は、初優勝を飾った。

浦和高校の攻撃は、均整のとれたもので、ゴールキーパーの活躍も目立った。浦和高校は、本大会でも、三國高校と対戦し、2-0で勝利した。浦和高校は、初優勝を飾った。

浦和高校の守備は、堅固で、ゴールキーパーの活躍も目立った。浦和高校は、本大会でも、三國高校と対戦し、2-0で勝利した。浦和高校は、初優勝を飾った。

# アサヒスポーツ

ASAHI SPORTS

1月19日号

昭和23年1月10日 第三種郵便物認可  
昭和27年1月19日発行  
編集人 高永正信

昭和24年2月25日 日本郵政  
特准第175号  
発行 第759号  
発行兼印刷人 春海敏男

発行所 東京本社 東京都千代田区有楽町2丁目3番地 電話(23)131  
大阪本社 大阪市北区中之島3丁目3番地 電話(23)131  
朝日新聞 西部本社 小倉市砂津字宮野口北380番地ノ1 電話 2781

毎週土曜日発行  
定価 10円

S  
27  
1  
19



## ゴール前のスリル

—朝日招待サッカー関学対慶大戦—

前半26分関学左コーナー・キックのボールを関学CH樽谷が慶大G江松岡(5番)と競り、ヘッドイングでゴールをねらった瞬間。ボールはわずかに上にそれたが、一秒の何分の一かの早さと一寸か二寸のわずかな高さを必死に争うゴール前のスリルである。1番は慶大G K茂木、左端は慶大RH面角。

東西の大学が顔を合せた朝日招待サッカー大会の第二日、関学対慶大の試合は十三日西宮球技場で行われた。強力を誇る両軍のフォーワードはしばしばスピードとスリルに富んだ攻撃を繰返したが、ことに関学のフォーワードがみせた猛攻振りはこの日の圧巻で、写真は

◇世部写真部員撮影◇





# 全日本サッカー選手権

## 全慶大、連勝を飾る

### 関学ク、準決勝に惜敗

一九五二年十五年全日本サッカー選手権大会は三日から四日、静岡県藤枝市の藤枝東高校体育館で開かれ、全慶大が真事に二年連続優勝、今シーズンの天皇杯を獲得した。

関西代表関西学院クは、その主力をなす学生が、学生界で今シーズン不敗の記録を残しているのに、さらに光彩を添えようとする意気込みで、対全慶大戦には猛烈な圧迫を続けたが、不運にも全慶大に逃げ切れず、決勝戦は昨シーズン同様全慶大（推薦）と大阪ク（関西）の間で再び争れたが、大阪クは手塚外に元気がなく、前半に大きく離されて敗れた。

意外の苦戦を経て進んだので、せうかの決勝には負傷者も疲労でまったりと鈍くなっていた。全慶大も前日関学クに苦しみはしたが、さすが若い学生が手だけには動きの早さに大きく大阪クを離していった。大阪としては動きの弱味をカバーするために緩慢なテンポの運びで慶大を自分のペースに引き入れようとしたが、全慶大は適応していた一宮を出してそのリードで大阪の策に陥らせず、ペースを保てたが、試合を進める結果となった。

大阪はCF斎川弟を相手DF二宮の近くまで下げてFW四、HB三、FB三の菱形陣をとり、スタート、慶大の意表をつかんとしたが長くは続かなかった。やはりFWがボールを奪えないこと、前半七分、RW則武のセンターリングがあつたがそのまゝゴールインしたことで、大阪の策は狂ってしまった。

そうして若さから来る動きの差はその後ハッキリと現われて、そのまゝ勝敗となった。すなわち十五分LW早川、三十一分LW重松、四十一分二宮と点を加えたのは、ボールを左右回した結果で、試合は前半で決まった。

## 雨に苦戦した大阪

△一回戦（三目）  
全慶大 4 2 2 0 0 仙台合ク  
（推薦） 2 2 0 0 0 東北  
東洋工業 3 2 1 1 2 六甲ク  
（中野） 2 2 0 0 0 富山ク  
志太ク 2 2 0 0 0 北陸  
関学ク 2 2 0 0 0 刈谷ク  
（関西） 0 0 0 0 0 東海

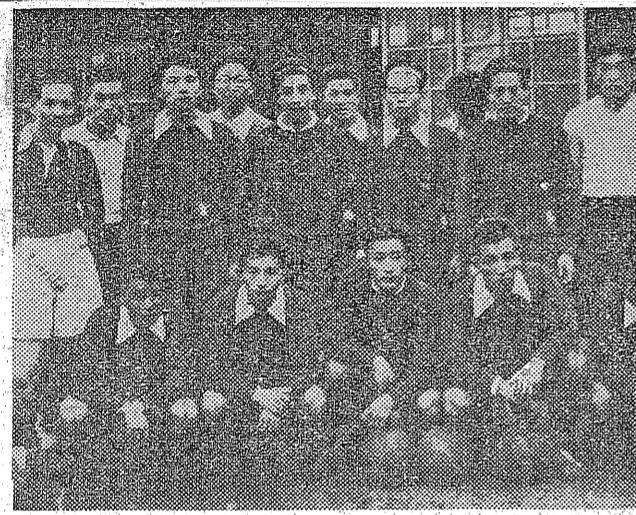
△二回戦（四目）  
松山ク 2 1 0 0 0 明大  
（抽選） 1 0 0 0 0 大  
大 6 3 3 0 0 藤葉ク  
（関東） 3 3 0 0 0 中部  
大阪ク 4 3 0 0 0 鳥原ク  
（関西） 3 1 0 0 0 九州

△三回戦（四目）  
全慶大 3 2 1 0 0 東洋工業  
関学ク 1 0 0 0 0 全立教

△一回戦（三目）  
全慶大 4 2 2 0 0 仙台合ク  
（推薦） 2 2 0 0 0 東北  
東洋工業 3 2 1 1 2 六甲ク  
（中野） 2 2 0 0 0 富山ク  
志太ク 2 2 0 0 0 北陸  
関学ク 2 2 0 0 0 刈谷ク  
（関西） 0 0 0 0 0 東海

△二回戦（四目）  
松山ク 2 1 0 0 0 明大  
（抽選） 1 0 0 0 0 大  
大 6 3 3 0 0 藤葉ク  
（関東） 3 3 0 0 0 中部  
大阪ク 4 3 0 0 0 鳥原ク  
（関西） 3 1 0 0 0 九州

△三回戦（四目）  
全慶大 3 2 1 0 0 東洋工業  
関学ク 1 0 0 0 0 全立教



△一回戦（三目）  
全慶大 4 2 2 0 0 仙台合ク  
（推薦） 2 2 0 0 0 東北  
東洋工業 3 2 1 1 2 六甲ク  
（中野） 2 2 0 0 0 富山ク  
志太ク 2 2 0 0 0 北陸  
関学ク 2 2 0 0 0 刈谷ク  
（関西） 0 0 0 0 0 東海

△二回戦（四目）  
松山ク 2 1 0 0 0 明大  
（抽選） 1 0 0 0 0 大  
大 6 3 3 0 0 藤葉ク  
（関東） 3 3 0 0 0 中部  
大阪ク 4 3 0 0 0 鳥原ク  
（関西） 3 1 0 0 0 九州

△三回戦（四目）  
全慶大 3 2 1 0 0 東洋工業  
関学ク 1 0 0 0 0 全立教



## 強過ぎた関学のパス

△準決勝（五目）  
全慶大 1 0 0 0 0 関学ク  
（関学） 4 2 1 0 0 全慶大

△三回戦（四目）  
全慶大 3 2 1 0 0 東洋工業  
関学ク 1 0 0 0 0 全立教

江崎田が左に回り込んで受け、そのセンターリングがゴール前直撃となった中からR長沼がぎりぎりの右隅に決めて関学の勝利となった。

△一回戦（三目）  
全慶大 4 2 2 0 0 仙台合ク  
（推薦） 2 2 0 0 0 東北  
東洋工業 3 2 1 1 2 六甲ク  
（中野） 2 2 0 0 0 富山ク  
志太ク 2 2 0 0 0 北陸  
関学ク 2 2 0 0 0 刈谷ク  
（関西） 0 0 0 0 0 東海

△二回戦（四目）  
松山ク 2 1 0 0 0 明大  
（抽選） 1 0 0 0 0 大  
大 6 3 3 0 0 藤葉ク  
（関東） 3 3 0 0 0 中部  
大阪ク 4 3 0 0 0 鳥原ク  
（関西） 3 1 0 0 0 九州

△三回戦（四目）  
全慶大 3 2 1 0 0 東洋工業  
関学ク 1 0 0 0 0 全立教

第一回戦対仙台戦、仙台ゴール前に激しく迫る全慶大（白シャツ）

東洋工業は前日六甲クを破って対全慶大戦に興味を持たず善戦したが、やはり技術も一歩を譲らねばならなかった。全慶大も二宮を休ませRW則武以外は学生ばかりで臨んだのでその試合の運び方を懸念したが、それも杞憂に終わって危ない勝利だった。東洋工業は実業用としては活動量にも恵まれているが学生陣にはかなわず、こゝに慶の両インナーに押し寄せた。ハーフが受身となって中盤を制せられ勝ちとなつたので、FWへのフォーローが少く攻撃層が薄くなつた。FWはパス・ワークが並調で味方よりも走力のあるバックスに押しつけてはダメだろ。バックスは前には強いが背後や左右のゆさぶりにもさがあり、こゝに攻勢から守勢と移った直後によく崩れる。対慶大戦の失点もその場合が多かつた。個人的にはGK下村の勇敢なプレーが印象深く、判断、キックなど素質豊かな有望な選手だ。

以上のボールをキープしたのだがスピードに乗った攻撃はゴール前でもパスが強くなり過ぎてシュートになるものが受け切れぬことが多かった。こゝに前半27分LB岡村のパスを受けたCF藤田が、バックスのタックルをすり抜けて

ゴール・エリア左スミのあたりからセンターリングしてRW木村が素晴らしい勢いで飛び込んだのは、そのコースといふ木村のタックルといふ好プレーだったが、これもセンターリングが強過ぎた。後半になって鋭さは衰え、こゝにCF藤田が抜けた。LW徳弘が中盤から内側へ入り過ぎていたが、関学はこゝと左右にゆさぶればよかった。全慶大は前半鈍い動きで全く苦戦に陥つたが、34分関学LI村田のシュートを見事なゴール・カバで救つたR土井田、GK津田、CH長沼らの活躍で辛くも前半を耐え、後半2分気をゆるめていた関学バックスの隙を衝き、LW岩淵が左スミに幸運の一点を挙げた。これで慶大はやゝ立ち直り、バックスの出足もよくなったが、FWはやはり決定的チャンスを作れないで結局一点を待つて逃げ込んだ。

大阪ク対志太クは志太クが同点に返したあと、PKに失敗してリドの機を逃したの痛かったが、技術の差は大きく所詮勝てぬ相手だった。（大谷 四郎）

▽三位決定戦  
関学ク 5 0 0 0 0 志太ク

# 全日本実業団サッカー

第五回全日本実業団サッカー選手権は二十四日から二十七日までの四日間神宮球場で挙行、常勝の関西代表田辺製薬を撃つことがはばむかに興味を持たれていたが、田辺の實力は依然強いが、東洋工業三年連続優勝を挙げた。田辺ははばむホープとみられた東洋工業(中国)は準決勝に敗れ、決勝は昨年同様の顔合わせであった。

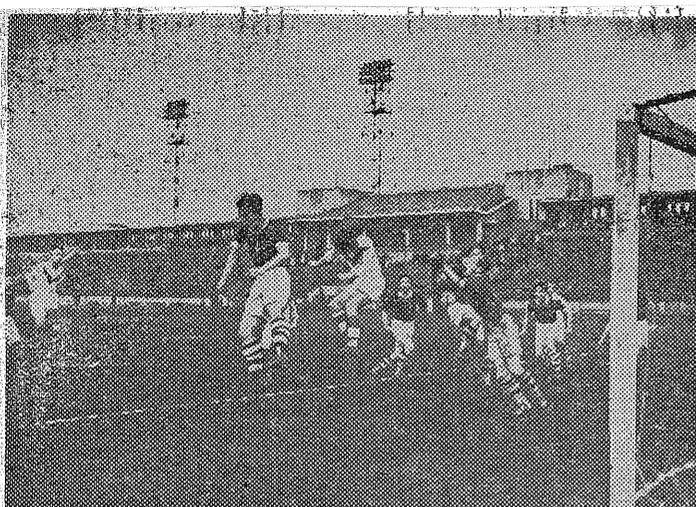
## 田辺の王座揺がず

### 東洋工業、準決勝で敗る

準決勝：シードされた四チームが予想通り準決勝へ進んだ。田辺は茨城日立の激しい当たりと動きを警戒して前後半ともにR.H.田島まで繰り出し慎重に対戦したが、茨城日立は昨年田辺を苦しめた強い動きが見えず、グラウンド上は10メートル近くを走る強風の風上に陣した前半も守勢となった。昨年も同様、茨城日立の特色であった当り動きの激しさはアウルに近しい荒々しさでさえあったので決して推察出来るものではないが、その特色が弱くなつては技術の差がはばむり現れた。ことに強風のもとでは各個人のボール・コントロールに未熟なため奪った球のキープはむずかしく、パスも正確になるが、田辺の個人技はこの強風をコントロールする力があつた。しかし後半風の急な攻撃にもう点に止つたのは一流プレーヤーの多い同チームにしては試合運びが上手だった。

東洋工業は好試合だった。東洋対日立本社は好試合だった。実力互角の両軍は強風(風向悪い条件をいかに逆用するかがヤマ)で、日立が作戦にまよつて勝つた。前半風上に陣した東洋は攻勢を保ち、L.H.小畑の正確なパスが最も好機を生む可能性を持つていたが、パスのスピードに強風の变化があれば一層効果があつた。そのため10分過ぎに攻める。F松永に先取点をとられ、12分同点に返したがリードを奪えず前半を終つたのが後半への希望を弱めた。後半も両三度の好機はあつたが、風下に立つとサイド・ハーフのキープ力不足が現われ厚い攻撃層を作れず、一方日立本社は東洋ゴール前にパスが密集しないように目の目風を利用してロビング・ボールを上げて成功していた。

決勝：田辺は前半28分、F.C.F.にボールを奪はれては種田がR.H.田島の縦パスを受けて軽く横に払いこれをR.H.田島が受けて中央を見事に割つてドリブルした後半は6分、F.K.による得意な一点に止つたが、試合は後半20分以後を除いて田辺の一方的優勢に近かつた。シュート数は田辺の10本に對し日立はわずか二本、また雨のためグラウンドが滑りコーナー・キックは自然多くなつたが、その数の差とともに両軍攻守の程度を語っている。日立も優れたプレーヤーを相当数持っているが、やはり田辺のそれと比べるとは及ばなかつた。ことにL.W.岡本を一回戦の負傷で失つたのでF.W.が両翼とも弱くなり、田辺のバックスをサイドから衝けなくなった。従つて攻撃はセンター・3の縦パスにたよる単純なものとなつた。このようなG.H.加藤をはじめ老練な田辺のバックスにとっては思はずほどのところで、体力を消耗させずに案々とボールを奪ひ、フリーにも余裕が生じてボールを左右に回して日立より一段と優る変化に富んだ攻撃が出来る結果となつた。日立のバックも果敢なタックルをよく守つたが守るに精一杯で攻撃への振機を生むにパスを出すまでにはならなかつた。良いクワン・コンディションならばそれほどの差のあるチームではなからぬが、滑るグラウンドで後手々々と回つた出足とそれから生まれる気分的ゆとりは差を大きくしてボール扱いにも予想以上の差をみせていた。田辺が攻勢の割合に得た



点の少なかつたのは滑つてシュートの立足を奪われていたよりも、F和田の判断が鈍くボールを持つたことも数多くのCKをもつて出来なかつたことによるものと思われる。(大谷 四郎)

**サッカー成績**

△一回戦  
田辺製薬 4 2 0 0 富士電機 (関西)  
トヨタ自動車 2 1 0 1 三共 (関東)  
宮城東洋 1 0 0 0 日本製鋼 (東北)  
東洋工業 2 2 1 0 北海道 (東北)  
八幡製鉄 3 2 1 0 池田製鉄 (九州)  
日本製鋼 3 0 0 1 大阪府庁 (関西)  
日本電産 3 2 1 0 三井物産 (関東)  
日立本社 5 2 1 1 三井物産 (関東)

△二回戦  
田辺製薬 4 3 1 0 0 0 トヨタ自動車  
茨城日立 2 2 0 0 0 0 宮城東洋  
東洋工業 2 0 2 0 0 0 八幡製鉄  
日立本社 2 1 0 0 0 0 日本電産  
日立本社 2 1 0 0 0 0 金屋 (関西)  
日立本社 2 1 0 0 0 0 金屋 (関西)

△準決勝  
田辺製薬 3 2 1 0 1 茨城日立  
日立本社 2 1 0 1 0 1 東洋工業  
東洋工業 2 0 0 0 0 0 日立  
日立本社 2 1 0 0 0 0 日立

△三位決定戦  
田辺製薬 2 1 0 0 0 0 日立  
日立本社 2 1 0 0 0 0 日立

【日立本社】  
本木功、尾崎多、坂本英合、奥吉屋、松本、高松、高河、K.K.K.K.K.  
【東洋工業】  
G.F.B.H.B. F.W. C.K.K.K.K.  
【田辺製薬】  
田下村、田原、村田、田原、田、17361  
津木、西宮、加藤、高橋、和近、田、田辺製薬

## 香港サッカーチーム来日

かつて来日を伝へられていた全ホソソニア、現サッカー・チーム、全香港サッカー・チーム、以下二十一名は二十九日羽田に到着、約一週間の予定で各地を転戦する。

△六月一日(午後) 西花園球場 対全大阪  
△五日(午後七時) 神宮 対全慶大  
△七日(午後) 神宮 対関東  
△八日(午後) 神宮 対全日  
△八日(午後) 神宮 対全日  
△八日(午後) 神宮 対全日

## 優秀な個人技

### 豊富な試合経験のチーム

「変も比も我がの敵ではありませぬ。殊に支は比よりも、キックにおいて一日の長があります。コーナー・キックを譲り受けてゴールに入れる作戦や、蹴り方が左右同様に利き、横にも後方にも自由に蹴る所などは、大いに学ぶべき点だと思ひます。」

これは、今から三十五年前、東京を浦で開かれた第三回極東大会に参加し、初の国際試合に敗れたとき、竹内主将の感想として、時の新聞紙上に掲げられたものである。自由奔放ながらも優れたキックと、妙を得たフットワークは、大人と子供の相撲のようにもまたとないものであり、初めに見るとヘッドインに驚異の眼をみはつたのであるから、戦術的には大きな関心を引いたことはいふまでもない。このころ、わが蹴球は、中華を打ち破る日を目標にして進んだのだが、昭和五年神宮球場で催された第九回大会のと

【同長】王志强(香港華人蹴球協会会長) 【顧問】林昌福(光華體育會顧問) 【マネージャー】兼コーチ 曹秋亭(光華チーム監督) G.K.張占美(上海聖約翰學校出) F.W.張士義(吳興祥、雷樹海) (杭州之江大出) H.B.韓尼波(上海聖約翰學校出) 陸慶祥(上海光華大出) 鄧廣(廣東大出) 伏燭業(上海法政大出) F.W.金録生(上海光華大出) 鄧文治(香港華仁書院出) 李養堯(同上) 張金海(上海民生中出) 韓龍海(上海交通大出) 徐祖國(上海復旦大出) 陳明哲(上海華華大出) 羅國泰(香港華仁書院出)

曹コーチのほか五名、国際試合に立つた老練の士が多い。六回の国際試合では一勝一敗二分の戦果を残し、昨秋来日したスウェーデンには1-3で敗れている。全日本軍との試合を終つたとき、スウェーデン・チームのリーパー監督は、全日本軍は香港とは異なる差を持つていてと語っていたが、平均年齢廿九歳の老巧と洗練されたその足技で試合を進めようから、全香港は先ず悔い難い相手と思われ。殊に、中華チーム相手の国際試合経験を持つ第一線の關士は川本泰三君のみでは、いささか不安なとはしない。昭和九年マニラにおける対戦では、フリーキックは日本が19、中華が12という記録を残している。これは一例であるが、従来の両国間の試合は、スタンドを沸かしたせるようなエキサイティング・ゲームが多かつた。それとていふのも、ルールに認められた極限、またはその線と逸脱するようそのプレーに端を発するものであつたと思われ。来る三十一日関西の第一戦を皮切りとし、八日の全日本軍を最終とする五試合は戦術的にはわが方が優れていると思われるが、豊富な試合経験と特有の個人技は、全香港がまさつており、試合内容はスウェーデンを迎えた場合のよう、堪能させるものではない。熱気を帯びた激突の連続に、手に汗を流すほど興奮するものと思われ。一行は王志强氏を代表とし、林顧問、秦秘書、曹コーチ

全香港サッカー・チーム来日

関西で一勝一引分

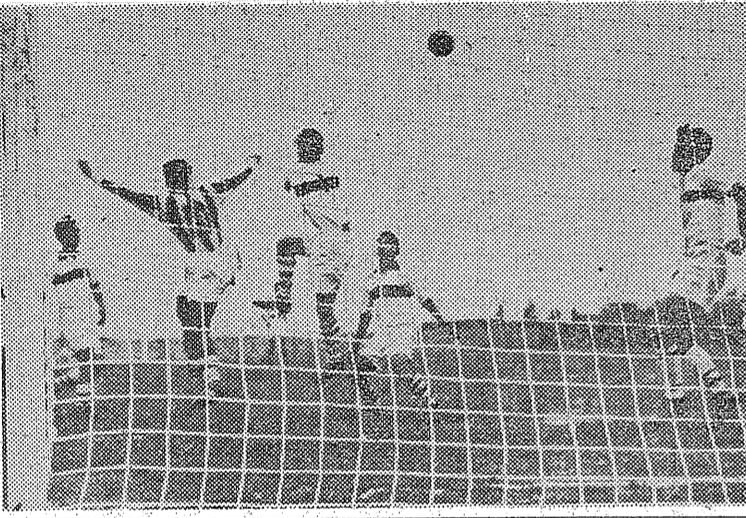
余力残したプレーぶり

昭和十二年の北軍チーム以来十年ぶりに二十九日來日した華人サッカー・チーム、全香港華人選抜軍は三十一日西下、三十一日神戸市民運動場を全神戸(全關西)ついで六月二日花園で全大阪

全神戸との第一戦

旅の疲れで不元氣な香港

五月三十一日・神戸 全香港 1-0-0 全神戸 0-0-0 全關西 0-0-0 全關東 0-0-0 全關中 0-0-0 全關南 0-0-0 全關北 0-0-0 全關西 0-0-0 全關東 0-0-0 全關中 0-0-0 全關南 0-0-0 全關北 0-0-0



トは天の正面を衝いて空し。34分神戸王座の上げたロビングをキーパー張バシチ損ない危うかつたが、O日良よくこれをクリヤーする。34分半のシュートはバーを越して加算ならず、ここで審判の本イッスル鳴り、香港1-0で勝つ。

守勢の作戦が成功

日本到着早々の試合で、CF李は朝から四回も下痢しており、他のものもまた飛行機の疲れが回復してないので非常に元氣のない試合であった。最初のゲームで日本チームの勝手が分らないので、引分けでも日本には一点も許さない守勢の作戦で出て、特にRに守備ラインに下った。そしてこれが成功した。

よく闘った全大阪

原のミスで拾い上げた金に出し、金大阪ゴール右隅を割ってゴールの同点、23分大阪岩谷中央河川からパスを上げ、シュート成り2-1と再びリードに立つ。29分香港山形のフツングでPKを得たが、R日伏左へけて失敗す。

優れた体のこなし

旅の疲れと全日本軍戦に備えて二試合とも試合時間は七分に短縮されたのは物足りなかつたが、とくに第一戦の全神戸戦は日本チームの偵察として無理をしない、楽な試合運びを進めていたため、その実力の全容を知ることができ、かしく、二、三の好プレーの中、その片りんをうかがうより仕方なかつた。個人ではCF張士、OH呉祺祥が長身脚で身体の「こなし」

忠実なバックの守備

香港チームを觀て 手島志郎

も優れ、プレーに余裕があり相当激しい動きにも強く耐えられるように見え、さすが守備の強さを誇るだけであつた。FWでは、球が高く浮いているところをトツツするかにみせかけてシュートし一点を決めたR日治の球は、球技のあるいは姿勢などに揚げられた落着きと巧さが現われていた。戦術的には3バックの守備を忠実に守つて、攻撃の手法はロビングボールを上げてヘッドインの後の崩れを一気に切切つとする力の戦法だつた。

鮮やかなシュート 対美隊はインディションも且つ、その上香港は余力を残して、その前のメンバからCFを交代したばかり、大阪もまた大阪クラブに一人の学生をRWに配した強力チームとついで、大いに強気にしていたら、案の定見込のある好いゲームをみせてもつた。

手島氏略歴 東大昭和七年卒、昭和五年東京極東オリンピックで中国と3-3と初めて引分けて、ベルリン・オリンピック参加員と、大阪日本サッカーの全盛期といわれた時のCFである。五尺二寸の短身で一世の名CFとなつたが、戦術眼も鋭く、氏の指導で、関西から最近の日本代表多数を生んだ。現在田辺製薬専務。45歳。

六月一日・花園 全香港 2-0-2 全大阪 0-0-0 全關西 0-0-0 全關東 0-0-0 全關中 0-0-0 全關南 0-0-0 全關北 0-0-0

30分香港徐と金の好パスで大阪陣に因迫金左から右足を使って小さロビングをあげれば、ボールはRBの頭上を越して見事ゴール成り2-0の同点。後半11分香港LW羅のシュートは大阪ゴール左へ逸す、13分香港CF徐の強シュートは左ポストに当たって無効。15分大阪R日伏川に当たって無効。15分大阪岩谷のバック・パスをR日伏川(後半空原に代つて出た)ねらつたがキーパー張を防ぎ、32分香港金のシュートはキーパー岸本に阻まれる。

大阪のパスは巧い

前日の全神戸よりはスピードは落ちていたが組織的なシュート・パスの巧いには感心した。大阪は低いシュート・パスばかり使つたので、われわれの得意なヘッドインの手を封じられて弱つた。特にL川本君は優秀であつた。あのチームなら香港でも恥かしくない。まだ「われわれ」は疲労が回復せず好調なチーム・ワークは見せられなかつたが、東京の試合までには休養がとれるので今後はもっとよい試合が出来よう。

そのミスに生まれた瞬間の優位を拡大してL日金の中央突破で一点目成功した。一点目も中盤で大阪RHの崩れから始まり再びL日金が左前に突込み右足のアウト・サイドで球を浮かしての鮮やかなシュートであつた。

後半、コーナーキックに長身のL日金がゴール前に進出してヘッドインする態勢をとり、一回は成功しかけたあのプレーは可成り脅威的である。またタイム・アツプ寸前にLW羅がR日伏を振り切つて単身ダッシュし、フリー・シュ

毎週土曜日発行

昭和23年1月10日 第三種郵便物認可  
昭和27年6月14日発行  
編集人 高永正信

昭和24年2月25日 鉄道特別取扱新聞 第175号  
発行 第780号  
発行兼印刷人 春海鏡男

発行所 東京本社 東京都千代田区有楽町2丁目3番地 電話(23)131  
大阪本社 大阪市北区中之島3丁目3番地 電話(23)131  
朝日新聞 西部本社 小倉市砂津字宮野口北38-0番地ノ1 電話 2781

定価 10円

S  
27  
・  
6  
・  
14

# アサヒスポーツ



6月14日号

## G・K津田の好防

全日本対香港サッカー

全日本対全香港親善サッカー戦は小雨煙ぶる八日、東京神宮競技場で行われ4-3で全日本が辛勝した。写真は前半31分香港は全日本ゴール左にコーナー・キックを得たが、LF金のキックを全日本キーパー津田が飛び出しダイレクトでセーブしたところ。津田の後は香港LW羅、全日本CH松永、同じくLB岡田の順。

8日・神宮競技場にて 真島写真部員撮影



# FWの鋭さを発揮

## 香港、慶大のスキを衝く

【全香港】(1)金慶大  
 (主審) 杉山 綱(福島)  
 (全慶大)  
 田島 竹次(武木宮川松)  
 津土 北亮(松則鈴) 早重 03130  
 GK FB HB FW KKKK  
 GFB HB FW CFFGP  
 美翁 海津 隆治(国生泰)  
 占春土 金沢 乃明(文相徳)  
 張李 殿 張 兵 伏 陳 輝 徐 金 羅

【全香港】  
 香港の攻撃で試合は始まり、そのバックスは盛んにロビングボールを慶大ゴール前に上げ、FWもロング・シュートを幾度も

試みた。11分にはOF徐がロビング・ボールを受けてゴール前に迫り、18分にはL金のシュートがポストに当たり、27分にはRW陣のセンターリングをカットしようとしたGK津田落してLW陣フリー・シュートのチャンスを迎えるなど、いずれもあわやゴールと思わせる攻撃を続けたが、慶大バックスが相手のタックルで救っているうちに39分左OKの後慶大L北島のクリアをOF徐が素早いチャージで身体にあて、最初のゴールを香港が挙げた。

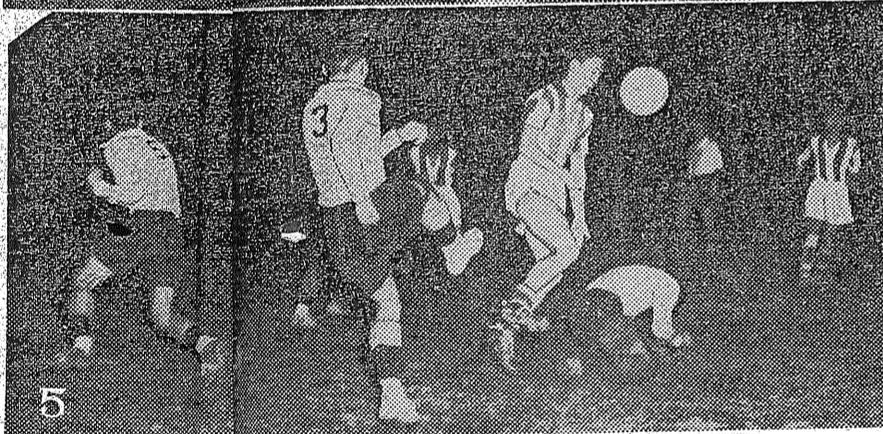
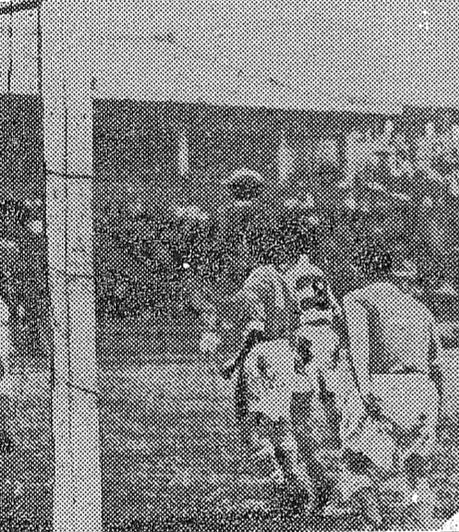
後半に入つて慶大FWがショート・パスの速攻に調子をとり、18分R鈴木のドリブルからRW則武に渡り、そのセンターリングをL早川ヘッドリングに決めてタイとなり試合は活気を帯びて来た。

この日慶大は後半に得意の速攻を用いて試合を奪おうと考え、とくに最後の十五分間をヤマとして前半は両サイド・ハーフを後退させ、中盤はインサイドがゆっくゆっく守りに主力を置いてタイが1-0位で逃げたおくれ作戦に出た。これは結果的に一応成功しかけ、後半は予想通り速いパスでチャンスを作り、1-1と返したところまではよかった。だが最後の10分にR土井田のハンドでPKをとられ一点を献上した時若い学生を受けた気分的な打撃は相

當天きく望みを失った。そのためマークがゆるんだスキを巧みに衝かれたのが第三点目だった。

香港はまず慶大OF二宮をOHとRHではさむようにサツチリとマークし、ここに前半は慶大RW則武はじめ両インサイドの出来が悪く、実際はゆっくゆっくするところから簡単に奪われていたので香港の攻撃は楽になり、FWも来日以来最もスピードのある攻撃で、得点に現われた以上の鋭いものだった。後半に入つてその攻撃はやや鈍っていた。

香港チームの習慣で一度攻めれば次は守りまた次の攻撃の準備をするのだが、これは日程のつまった遠征試合を多くやるチームが自然に身につける試合運びの老巧さであろう。(三試合評)大谷記



●対関東学生戦前半33分、学生軍LH宮崎スライディング・タックルに香港の攻撃を防ぐ●同試合で見せた香港LB殿のヘッドリング、最も優秀なプレイヤー殿が巧みな連続ヘッドリングでボールを落とす関東学生のチャージをかわす美技、右からLB殿、CH兵、RW泰田、CF鹿井●対全日本戦前半44分2-1と日本リードの直前、LW加納ドリブルを進み、CH兵の猛烈的なタックルをジャンプして抜いた瞬間●同試合前半10分、香港右コーナーキックを日本LB岡田(中央3番)のヘッドリングに迷る●対全慶大戦前半33分、慶大LB北島のクリアした球が香港CF徐の右肩に当り香港初の得点となった直前

全香港人サッカー・チーム  
との試合を終えて真先に感じた  
ことは、われわれの力で築き上  
げようと努力している日本サッ  
カーの技術的進歩が、世界の流  
れの中に今や全く合流している  
といふことである。アジア大会  
で初回の国際的検閲台を踏んだ日  
本チームは、ついでにスウェー  
デン、全香港と貴重な体験を積  
むに及んで長足の進歩を示した  
ものだ。

### 全香港と闘って

私は全日本、  
全大阪、全  
全大阪の二  
にわたる彼ら  
のプレーにつ  
き接する機  
を得たが、わ  
れと根本的に  
違ふ点は、彼  
がよく鍛えら  
れた素早い足  
でボールを好  
むことであつ  
た。どんな瞬  
間でも自分の  
うごめく思つ  
たように速度、  
角度でキック  
出来ること  
は、各人のフ  
レッシュに豊  
か出来、ひい  
てはチーム力  
に豊か化を加  
える。試合終  
了後全香港  
チームの林顧問は「日本の  
チームは戦つて攻撃に変化が少  
く、中盤から  
スタートだけ  
で一気に攻め  
ていくが、殊  
に学生チーム  
は半分の力  
でプレーして  
いる。しかし  
ゴールは大き  
い、そのうち  
もキックが

エドワード・チームが不得手な球を  
十分に殺すことが出来なかつた  
ため、相手にタックルのスキを容  
易に与える結果となる。  
試合中私がFWの最前線に位  
置して責任を感じたことは、味  
方のFWの攻撃層を厚くして二  
重、三重の波状の女子力をもた  
すためには、相手バックスのア  
タックを十分にこぼさなければ  
ならぬといふことであつた。  
バックスの一匹のタックルで  
簡単に引かからず、一気には返  
されるようでは、折角味方バ  
ックスが攻勢を取返しては何も  
ならない。むしろ前進隊になつ  
た味方は裏をつかれてピンチに  
追いつかれて終

## 痛感した足技の相違

### 全日本代表選手 岩谷俊夫



岩谷俊夫選手

このことについて林顧問は  
「私達は海外遠征によつて、す  
でに四年も前からこのようにし  
てポジションをチェンジすれば  
いい味方を取つてピンチに追  
いつかれて終

来るかと研究を重ねています。  
日本の学生チームは中盤を大交  
替におかれて終つた。バックス同  
士が楽に球を回しながらFWア  
インのそのうのを待っている。  
高いバウンドのボールを地上に  
落さないので処理出来る力も、二  
歩われわれが足を踏むと、さ  
ういふにもならないのである。

全日本と全大阪は日本チーム  
の中で最も個人技にすぐれた選  
手を多くそろえているが、とも  
に全香港との試合の際にこれ  
といふ上上の筋を働かされた  
は、全く、ポジションをすしな  
がら繰返す短距離のシュート・  
パス、ゴール近くでゆるいフ  
レッシュが大きい、そのうち  
もキックが

も、論議の3Bは深い、  
スウェーデンに較べると組織防  
御の面で大分甘い感じがした。  
スウェーデンの3Bに見られ  
た巧みな位置のとり方は、ど  
うして攻めるべきかクワウン  
でた。嗅覚するのみだつた。  
香港は個人々々では随分強  
いと思つて追つてくるが、  
全日本と全大阪のこの作戦に  
は相手手こずつていた。す  
が随分見つけられた。

なだれこんだこの間に斜めのパ  
スが入つたもの、二層目は一線  
になつたバックスの裏への気  
なした私に走りこむと、間差  
をいれずB1直川から素にタイ  
ムタのよみパスを通つたもの  
であつた。また全日本の試合の先  
取点は、LW加納が相手FBと  
対峙して、プレーが止つた  
かに見え、B1直川がタテ  
に突込み、香港バックスが  
気にとられるプレーで決ま  
つた。

この三つのプレーは従来深く  
守つたFWラインをすしな  
がら繰返す短距離のシュート・  
パス、ゴール近くでゆるいフ  
レッシュが大きい、そのうち  
もキックが

相互関係を調べ、  
て見ると、ス  
ウェーデンは全  
香港と1-1で引  
分、3-1で勝  
日本と3-0、  
結局香港チームから学び  
たものは、よく鍛えられた素  
な体と、球を自由に扱つて  
この出来る足技、それに加  
えて彼ら十七年以前の単調な  
型をさりと捨て、巧みな足  
を基礎として世界サッカーの  
術的主流とみられる変化ある  
撃法を身につけ始めているこ  
うである。それらを体得し  
てこそ本場のサッカーの面白  
さあり醍醐味があるものとい  
ふ。

（筆者は神戸一中、早大出身、  
共同通信記者、26歳、学生時代  
はリーとして活躍、日本戦後引  
き続き日本代表選手でアジア大  
会対スウェーデン戦にも出場）

# 改善したい審判技術

## プレーの進歩にも影響

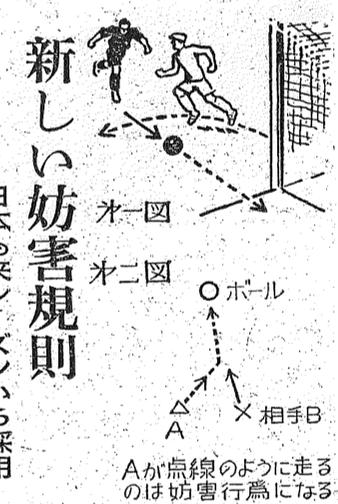
この対香港戦で審判技術が問題となった。ここに香港側から審判が拙くても試合をスポイルしたという苦情が聞かれた。五つの試合を通じていすれと言ふ多かれ少かれ審判に対する不平らしい香港選手の見解がみられた。大阪では大阪と和野のフアウル・プレーが異常なまでに香港のプレーが変って同様のフアウルがみられ始めた。そのうち幾つかにはフアウルが吹かれたが、最も目立ったのは対全日本戦で香港のF.W.加納に対するフアウル・プレーだった(且日陸も一度ほど危険なフアウルがあったが)。

後、聞けば加納が最初をかけたのに審判は何もしなかった。だから同じことをやったのにその時はホイッスルにならず、それで気持ちを奮って繰り返したとうわづらしい。もし論議のまな審判に対するデモンストレーションは許されてよいわけはない。このような神経も理解し難いのだが、国際試合にならなればエキサイトしてくると往々こんなことが起り勝ちであるといへる。香港チームなどは昔の極東大会当時ならあると予想以上フアウルで溫和しい選手だつたといへる。極東ではサイロンがとく下流の選手だ。しかしフアウルはやはりあつて禁止されなければならないもので、これを繰り返せば試合をスポイルさせないのが審判の目的である。

しかし香港が日本の審判は拙いといふのは確かに当たっているようにうた。むしろ香港がこの点をばきり指摘したことは敬んで、日本のサッカーに役に立たなければならぬ。審判は文字に書かれた規則をよく覚えていても名審判にはなれない。豊富な経験が必要である。つまり規則を具体的にプレーにどう適用するか、難い。現実はいづも規則に先行しようとするから、プレーの進歩している外国での解釈をいづも吸収して、これを適用する技術を練習しておかなければならぬ。容易ならぬ仕事を持つてゐるわけだ。審判がもし日本流に解釈してフアウル・プレーとしないことが本場ではフアウルと解釈されておれば、日本のプレーが国際試合に通用しないばかりか、プレーの進歩も遅れて行くことになる。ルールの意味を解明してゲームで適用するのが審判であるから、プレーを想像する審判の面は逆に正しいプレーをリードするもので、ゲームをよくさせるか悪くさせるかは審判にかかるといへるのである。

刺激のなかつた日本のレフェリングは残念ながら停滞し、むしろプレーヤーから逆に引き寄せられてゐる。いへる個向にあつた。これではプレーの進歩も驚東ないといふのがこのごろの審判技術に対する感である。なかにはスウェーデンや香港の人から良審判だといわれた人も一、二ある。しかし一般に今の審判は非常にルールになつてゐる。サッカーでは審判は試合関係者から直接非難され絶対服従しなければならぬが、この立場に気をゆるめてゐるとその権威も保てなくなるだろう。

いまでは英国の審判が一番上手らしい。上手になるにはまずルールを正しく解釈していなければならぬが、スウェーデンや香港の人々はわれわれが疑問を持つてゐるルールの解釈にいづも手掛りを与えてくれた。例へばオフサイドは味方と相手とがゴールラインに平行の同一線上でもオフサイドであること、また香港では一員全くプレーと関係のない位置でもオフサイドをとられる慣習だといふ。スウェーデンは日本選手にフアウルのフアウルが多岐に非難されてゐた。なしかにそれでこれは大きな欠点だ。これを大目に見てゐると柔軟な身体が作れなくなる。ヘッドリングを繰り返す場合、多くは片足(サ)を上げ、ジャンプ、カカトを地面から離れた足裏のタックルなども危険なフアウルになる。日本選手に多い頭の真上から手の動作を開始するスローインは違反で、頭の後ろから開始して頭上を通るのだけはオーヴァー・ヘッド(Cover head)にならないことだ。



最後に重要なのは新しい妨害規則(Obstruction rule)である。国際ルールでは来シーズンの初め(昨秋)から採用されているが、日本に届いたのがシーズン中途だったので我が国には来シーズンから採用される規則で、これによると恐らくわが国のプレーヤーは最初相当驚いてゐる。従来はフ

レールの性質を大幅に切り換えなければならぬほど大きな意味を持つてゐる。

ルールの条文では「ボールをタッチしないが故意に相手を妨害する場合は、すなわち相手方競技者とボールとの間を走ったり、相手方の邪魔になるよう身体を間に入れてたりの場合(Interpose the body)は違反で罰を受け、キックで罰せられる。例へば第一図のようにゴール・ラインへ流れるボールを相手FWがストップしようとして追つてゐるときゴール・キープがフアウルのコース(相手とボールの間)を横切ることはこの妨害行為になる。このようなプレーは従来タッチ・フアウルと並ぶべく見られた。次に相手と並ぶ

ボールを追うとき、第二図のように相手のゴール・ラインへ流れるボールに近づくことも出来なくなる。すなわち従来ボールを取らぬためには「相手方の身体を止めよ」といわれた方法は許されぬ。直接ボールへ真直ぐ進まねばならぬ。だから各プレーヤーにはボールへ対しそれと自由な道が開けてゐるわけだ。ボールをプレーするとき肩を相手の胸元に入れて「正しいタッチ」同時に相手の前面をボールをかきさらいながら横切るが、切り返すことはかまわぬが、その時身体を止めてヒジを張ったり、あるいは低くして相手を止め、フロッピング。その後ボールにプレーすることとは出来ない。結局、プレーはだボールに対しての走りわけなければならぬといふ意味である。

この簡単な条文は英国でもプレーを大いに変化させたところとされてゐる。ゲームがすつとクリンになるばかりでなく、プレーするにもしやすく、観る方にとつても判りやすくなる。また同時に審判の仕事もさしくなる。

日本ではこれまで相手方の身体をとめることが強調されて、この妨害行為がむしろ利用されて無意識のクセのようになってしまつてゐるから、恐らく当初は選手も審判をも面喰らわせたことだろう。しかし今後は相手の身体に向けていた精力をボール・テクニクに振り向けられるから、かつてボール・テクニクは進歩するのではなからうか。

これでスウェーデンや香港のチームが疑問を完全に解決したわけではないが、ちよと竹腰ヘッドコーチがスイスで近く行われる国際審判員講習会に参加し、さらにルンキ・オリンピックを用具等してゐることになつてゐるので、その時にはさらに詳細なルールの解釈が明らかとなるだろう。しかし香港(スウェーデン)の来日だボールの解釈と審判技術の大切さを考え直させてくれたことは敬視出来ない。(大谷 四郎)





# 5-5の引分け

## 早慶サッカー 内容はすこぶる凡戦

第三回早慶サッカー定期戦は七月四日午後七時から後楽園野球場特設のサッカー場で行われたが六月二十七日の試合が前半終了一-一のまま中止となったあとをうけての再試合だけに作戦は双方につつまけ、あとはフットボールという試合で結局5-5の引分けに終わった。

早大 3-2-5 慶大 2-1-3  
(評) ナイターで、客寄せもサッカーの発展には結構だが、グラウンドがせま過ぎて試合はすこぶる

早大 井木井路 崎崎 田井田 5-7-22  
福貴長 加山 宮城 小吉 伯石  
GK FB HB FW GK GK GK  
木田 島川 竹沢 島端 小川 松 9-16-18  
井 茂 北 北 茂 松 竹 岩 鈴 早 重  
(慶大)

前半12分早大ゴール前、慶大L  
I早川左からシュートせんとす  
るも早大H加計のタックルに  
阻まる

面口なかつた。それはバックスの長短から一着にゴール前殺到、中盤戦は接ぎでオライといったことが主な原因だが、この条件が早大に著しく有利だったことは否めなかつた。

したがって得点経過もすこぶる簡単で、アツという間の得点はかり、フットボールは結構だったがこのため両軍を通じて二十三本といふFKがあり、これらのほとんどが第十二条の反則によるものだったのは試合中断による間延びのための失算もさることながら、早慶の争いは単なる私闘ではなく、日本の大学サッカーを代表する試合だといふ観点から遺憾の意を表さざるを得なかつた。

5-5という大層得点での引分けは、途中で降った雨が夜間試合になれないGKの判断を狂わしたことも大きく影響していたと思ふが、両軍ともバックスの動きがにぶく、ピンチ予感の能力に欠け、与えずもがなの失点が大部分であつたといえる。

早大では浦高からの新人石田吉田が予期以上に強く、秋のリーグ戦に大きな希望をつないだ。グラウンドの狭さに比例して両軍ともスケールの大きい選手に欠けていたのは、皮肉な適合といへし。(早本 能冬)

### 本年度日本サッカー代表決まる

日本蹴球協会は七日今年度の日本代表選手ならびに代表候補選手を次のように発表した。

【日本代表選手】  
▼GK 津田幸男 (慶大) 三愛重 (勤務)  
▼バックス I 松永信夫 (東大) 大出、日野金清水 (勤務) 加藤信幸 (東大) 田辺製菓 (勤務) 杉本茂雄 (関学) 阪急電鉄 (勤務) 富田孝治 (早大) 田辺製菓 山形完(関大) 大阪府庁 大正正雄 (東大) 日野化学 柴田吉幸 (関学) 出、湯澤電機池

▼FW I 嶋田正憲 (関学) 田辺製菓 木村瑛 (関学) 則武謙 (神経) 大出、日本郵船 賀川太郎 (神経) 大出、田辺製菓 岩谷俊夫 (早大) 出、共同通信 加納孝 (早大) 東泉製菓 和田津苗 (関大) 田辺製菓) 以上十五名

【日本代表候補選手】  
▼GK I 下村幸雄 (広島一中、東洋) 洋 村岡博人 (教習大) 佐藤友彦 (関学)

▼バックス II 田村恵 (早大) 日本油脂 岡田吉夫 (早大) 岡崎 藤野 山口昭一 (明大) 自衛隊 藤 鈴木吉朗 (立大) 土井田宏之 (慶大) 堀口英雄 (早大) 日立製作所 平木隆三 (関学) 山縣修 (早大) 長竹義治 (慶大) 松木正忠 (教大)

▼FW II 松永信 (早大) 日立製作所 早川忠生 (慶大) 鈴木徳衛 (慶大) 長沼健 (関学) 竹下照彦 (立大) 藤井光雄 (中大) 伯井弘 (早大) 篠見二 (関大) 徳弘隆 (関学) 重松貞典 (慶大) 以上二十二名



# 関東大学サッカー展望

## 早、慶の優勝争い

### ダークホースは中、立

点もカバーされよう。

関東大学サッカーリーグ戦は十月五日から神宮競技場で例年の開幕戦に突入。早大対教大戦で開幕された。早大は前半振りが良かったが、後半は九回よく教大をゴールで降してシーズン第一戦をものにしました。果して早大の四連勝成るか、今季新陣容による各チームの内容を紹介して見よう。

**慶大** 昨年同様の優勝候補の筆頭にあげられていた。昨年のチームから両角、松



鈴木(慶大)



重松(慶大)



長竹(慶大)

岡、植村のハーフ・ラインが全部卒業して出たのは大きい。リーグ最強のフォワード・ラインがそのまま残っているのが何よりの強味。右から竹島、岩淵、鈴木、早川、重松とぞうい岩淵に代って突進力、シフト力、闘志の鈴木がセンターに回り万全を期しており、特に鈴木、早川、重松は進塁を示し、昨年より強力となっている。

ハーフはセンターの長竹が進塁し、これに荒川、松沢を両翼に配してまず無難だが、若手RB土井田に比べてLB北島が経験が浅いだけに弱点。キーパー茂木は二シーズン目で、かなり頼れるようになった。以上のようにフルバックに難点は認められるが、早慶リーグで示したように得点力豊富なFWをもつだけに、バックスの失

バックスの島村、FWの竹村が抜けだが、大体去年の後半のチームと変わらない。しかし中心選手鈴木を失ったのは痛手だが、ワシマンだった彼がいなくなったので、かえってチームの中がうまく行くと見る向きもある。

FWは沼崎、鈴木、竹下、星、高林で、両ウィングが原動力、シフト力が平均して去年よりまともになっている。得意のキック・エンド・ラッシュが板についているがあれでも少し横のパスにみがかかれば大したもの。このFWに比べ、バックスが弱いのが欠点だが、鈴木に代ったR日大村や、フィールディングに一段と進歩を示しているGK玉城に多大の期待がかけられている。

**早大** C加納、LB渡辺を失ったので、FWは塩沢、小田島、吉田、伯井、石田で昨シーズン活躍した桑田はムラが多いので使われない。吉田、石田はともに浦和高校の新人だが、体躯とスピードにすぐれた吉田のセンターが見もの。去年よりバランスがとれ、特に



伯井(早大)



山路(早大)

センター・スリーがよくなった。いるが、さほど小田島のシフト力に鋭さが増せば、かなりの得点力が期待されようが、両ウィングは、さほど。RBは加納、山崎、高崎、FBには青木、長井を配し、GKは昨年通り福井で、このバック陣はまずリーグ一の実力をもっているといえる。しかし時としてフルバックは敵の中央突破にもろいところを見せるのが難。昨年同様のバックのチームで、FWは慶大より落ち、伝統のねばりはあるとはいえず、よほど両ウィングをうまくつかってがんばらねば四連勝は骨だる。

**立大**

昨年のチームからLBカニハーフ鈴木吉、

**中大**

このチームは変動なく、反って七十二人という多数の部員を擁し、入選に値する選手が揃い、FWは依然全日本選手権(FC)が中心で、去年は彼を支援する選手がなくて苦難の道を行いたが、今季は高校界で鳴りたつた八重樫(盛岡一高)をセンターに起用、RB八重樫のコンビに多大の期待をかけている。しかしフルバックを除き、バックスは劣っている。しかしながら全体は昨年より強くなっており、立大と共にダークホース視されている。この二チームは早くも



鹿井(中大)

士目に顔が合うので、この結果が上位あるいは下位に落ちるかを決定するだけに興味をもって見られている。

**明大**

昨年二部から上った。よく三位を占めた。このチームは、立役者山口(RH)に松浦(LI)、相吉(GK)の三選手を失ったのは大きなマイナスで、開幕、早大は前半難行したが、



村岡(教大)

中大同様変動なく、FWにはOF大淵、RI広羽も健在で、これに全島で活躍した福原(西条高)も加わ

## 早大、第一戦を飾る

### 教大、前半の善闘空し

関東大学サッカーリーグは五日後三時から神宮競技場で恒例の開幕戦に突入。早大対教大戦で開幕された。早大は前半振りが良かったが、後半は九回よく教大をゴールで降してシーズン第一戦をものにしました。果して早大の四連勝成るか、今季新陣容による各チームの内容を紹介して見よう。

後半からFWが地方を現れし、早大を降し、開幕第一戦をか

早大 3-0-1 教大

関内宮島木原沢木淵原中  
村小(水松)深野大福山  
GK FB HB FW GK FB HB FW  
9 15 11 4 11 7  
0 0 0 0 0 0  
1 1 1 0 0 0

【評】早大はシーズン第一戦と風下に陣した故もあつたが、スタートはFWのポジション悪く、凡ミスが繰り返して、よいところは少しもなかった。反対に教大はバックスの好フィードに恵まれ、FWはよく動き、21分早大陣左に初のOKを得、このキックを早大GK三井パンチして前へ落すのを、RH水島十五ヤード辺から猛シュートを浴せたが、バーをたたくて惜しい逸撃となった。さほどにマいて二度早大陣右にOKをえる優勢を示し、28分にはRW深野の好センターリングをLW山中ヘッドリングでねらったが、これを捕まなくも左ポストに当たってチャンスを通した。

この早大の優勢に早大はOH山路がFW線に参加、アタックにつとめたが、教大バックスの好防に

早大対教大 後半35分教大フリーキックからの教大FWの攻撃を早大GK三井パンチで防ぎ、教大FWはL鈴木(左)CF大淵。

阻まれた。前半早大のシュート数は教大の七に對し、わずか二(20分の伯井と23分の吉田)で、それもゴール前に果敢に飛び出し、セリングするキーパー村岡の好守に空しかった。教大の優勢ぶりから得点は時間の問題と見られたが、果して40分中盤から永島が球を得、福原受けて強引に中央に持ちこみ、ヘッドリング・パスで早大バックを抜き出すには、ノー・マークの深野がシュートして1-0とリードに出た。

後半早大FWは小田島、伯井の両インナーを後ろに下げ、体形を大きくとって、大きな縦パスを使って教大陣に突入り、12分中央右から伯井がボールを得て、かなり前方に出ていた吉田にパス、吉田より教大FWをはずしてシュートし、教大ゴール右隅を割って同点した。以後は早大よりキープをつづけ、22分にはRW深野のパスを越す惜しいシュートあり、25分には絶対と思われたフリー・マークの伯井の右からのシュートは村岡飛び出して見事に防ぐ逸撃あり、試合に迫力を加えた。

だが早大の優勢さは、ついに実って26分の小田島のシュートで2-1と逆転した。これは早大が教大陣左にOKを得、ヘッドリングでせり合つたのち、LW杉野が出したパスを小田島がシュートに成功したもの。村岡は前へ出ていて帰陣おそく如何ともし難かった。以後教大は必死の回復につとめたが、LW山中が弱くまともならず、反対に早大は44分伯井が中央近くから出したオーバヘッド・パス(頭上を越す)を吉田走って受け、ノー・マークとなり、前進する村岡の左を抜いてシュート成り3-1と大きく離して勝った。前半の善闘にもかかわらず、教大バックスは後半早大FWの激しいパス・ワークにカバリングを乱されて敗北を招いたが、これはフォーワードと共に実力の相違に止むを得なかった。FWはバックスと比べ弱く、センターのいないが欠点。たゞし新人福原の強引なプレーは将来を期待されよう。

早大はLH高崎が入社試験で、またLW石田が足の故障で出られずベスト・メンバーとはいえないながら、まとまったバック陣に加えて、FWラインが昨年より強力になっているので、今シーズンの活躍が楽しみ。特に馬力ある両インナー伯井、小田島に配して、新人ではあるが脚力、シフト力、センターに優れる吉田(浦和商)をセンターに得て、このセンター・スリーが早大にとって近來にない期待をもてられた。またバックスは、はめらしくOF・サイド・トラップを使って成功、異色を示した。五日の試合では松丸主審は鮮やかなフリーリングを示していたが、もともと早大OH山路のフール・プレーに笛を吹くべきだった。(大橋 正路)



# 慶大、教大に辛勝

## 開大サッカー・リーグ第二 中大、立大を降す

【開大】開大サッカー・リーグ第二は、昨日（十九日）開大体育館で、中大と立大の試合が行われた。中大は立大を降す辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

# 関西サッカー展望

## クラブ・リーグが誕生

### 学生リーグも四部制に

関西のサッカー・シーンは、学生リーグで十九日から開幕となる。これと同時並行して、関西サッカー・リーグの誕生である。関西サッカー・リーグは、大阪六甲、神戸、京都府、奈良など地方的な試合は九月から各地で行われて来たけれども、いよいよビッグ・ゲームらしいものが観られるのはこれからである。今年にはオーストラリアの代表チームの来訪交渉が進められており、冬には香港から招かれてくるなどのビッグ・ニュースがあるが、フィナンシャル・リーグでは一試合が行われる程度から、学生リーグが関西のビッグ・ゲームの主役を占めることは例年通りである。しかし

## 関学、抜群の強味

### 興味は関大をめぐる二部争い

今シーズンの関西にはもう一つ見逃し得ないものが現れた。関西サッカー・リーグの誕生である。関西サッカー・リーグは、大阪六甲、神戸、京都府、奈良など地方的な試合は九月から各地で行われて来たけれども、いよいよビッグ・ゲームらしいものが観られるのはこれからである。今年にはオーストラリアの代表チームの来訪交渉が進められており、冬には香港から招かれてくるなどのビッグ・ニュースがあるが、フィナンシャル・リーグでは一試合が行われる程度から、学生リーグが関西のビッグ・ゲームの主役を占めることは例年通りである。しかし

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

石川島川原野野井	3	6	18
立花中野海陸中野島	GK	FB	FW
野田川原野野井	GK	FB	FW
收赤石高	5	11	8

田尾川島村山井橋中	3	6	14
福松石中三中内馬八吉田	GK	FB	FW
城本村上田橋本下	GK	FB	FW
玉小寺大村源治高	5	13	0

岡本宮島木原沢野原	6	3	8
村小水谷宮深広大福松	GK	FB	FW
木田島井竹沢島井木川松	GK	FB	FW
浅井北小長松竹橋野原	6	3	5

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。

中大は、前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。試合は、中大の前半から開始。立大は、後半に辛勝を挙げた。



# 慶、快調FWで楽勝

## 空回りした明大バックス

慶大は先陣を重松、鈴木を  
RWに入れ替え、インナーも左右  
交換するなどインナーの大移動を  
断行したことが気分的な差を盛っ  
たように見受けられ、生気に満ち

慶大 4-1-0 明大 0-0-0

慶大は先陣を重松、鈴木をRWに入れ替え、インナーも左右交換するなどインナーの大移動を断行したことが気分的な差を盛ったように見受けられ、生気に満ち

十分間の試合を通じて八分通り  
球を自らのものにし、しかも大き  
くけり出して東大バックスを走り  
回り、華麗なFW線に一段の迫力を  
加えた。

教大 3-1-0 東大 0-0-0

関学 4-1-0 神大 0-0-0

# 関学勝ち進む 関西学生サッカー

関学 6-4-0 神大 2-1-0

関学は前半から、リーグの神  
大対立大、関学対神大の二試  
合は三日前十一時から西宮球技  
場で快晴、無風に近いコンディシ  
ョンで進行、五分五分と交わられ  
第一試合は後半に入って神大の  
動きがよくなって快勝、第二試合  
は優勝候補の関学が順当に勝って  
五試合中三勝を得た。

進力はいつながら異彩を放って  
いたが、新人採沢の得点の勤の良  
さは最も注目し得るものであ  
り、華麗なFW線に一段の迫力を  
加えた。

教大 3-1-0 東大 0-0-0

関学 4-1-0 神大 0-0-0

# 早、またも明に敗る

## 慶心、無敗で優勝へ独走

早大は三試合は八、  
大、慶心、立教とハサレも善戦し  
ながら惜敗して来たが、この日よ  
うやくイレウの忠実な動きが結  
実した。しかしながらFWのゴ  
ール前における不手際は依然解  
せず、第二試合目とも東大バ  
ックスのもろい守備から拾ったも  
のだった。FWのシュート直前の  
感(手感、山感とも)の察知  
難い合の無理な、すばいキッ  
クの必要を痛感させられた。

早大 1-0-0 明大 0-0-0

### リーグ成績

勝点	試	勝	分	点
8	0	0	0	0
6	4	4	0	6
5	4	3	1	5
4	4	2	1	4
4	4	2	1	4
2	4	1	0	2
2	4	1	0	2
1	4	1	0	1
1	4	1	0	1
0	4	0	0	0

高林に球を集中したことは策の誤  
りであり、むしろ左右に大きくゆ  
さるべきではなかったか。

明大 2-1-0 早大 1-0-0

関学にも一点差の接戦を行った同  
大は予想以上の好調をみせてい  
るので興味を持たれた。第一試合は  
第一位決定に大きく響く試合であ  
った。案の定同大は前半よく互角  
に戦い、後半に入って関大FWが  
立ち直り同大守備陣の右側をつい  
て攻め、ゴール前では寛のシュエ  
トもさえて快勝した。神大対立大  
は同軍FWはともゴール前で  
動きよく決定的なシュート機をつ  
かぬす無得点に終わった。

関学は前半から、リーグの神  
大対立大、関学対神大の二試  
合は三日前十一時から西宮球技  
場で快晴、無風に近いコンディシ  
ョンで進行、五分五分と交わられ  
第一試合は後半に入って神大の  
動きがよくなって快勝、第二試合  
は優勝候補の関学が順当に勝って  
五試合中三勝を得た。

関大、同大に快勝

関大は前半から、リーグの神  
大対立大、関学対神大の二試  
合は三日前十一時から西宮球技  
場で快晴、無風に近いコンディシ  
ョンで進行、五分五分と交わられ  
第一試合は後半に入って神大の  
動きがよくなって快勝、第二試合  
は優勝候補の関学が順当に勝って  
五試合中三勝を得た。

勝点	試	勝	分	点
8	0	0	0	0
6	4	4	0	6
5	4	3	1	5
4	4	2	1	4
4	4	2	1	4
2	4	1	0	2
2	4	1	0	2
1	4	1	0	1
1	4	1	0	1
0	4	0	0	0



# アサヒスポーツ

ASAHI SPORTS

毎週土曜日発行

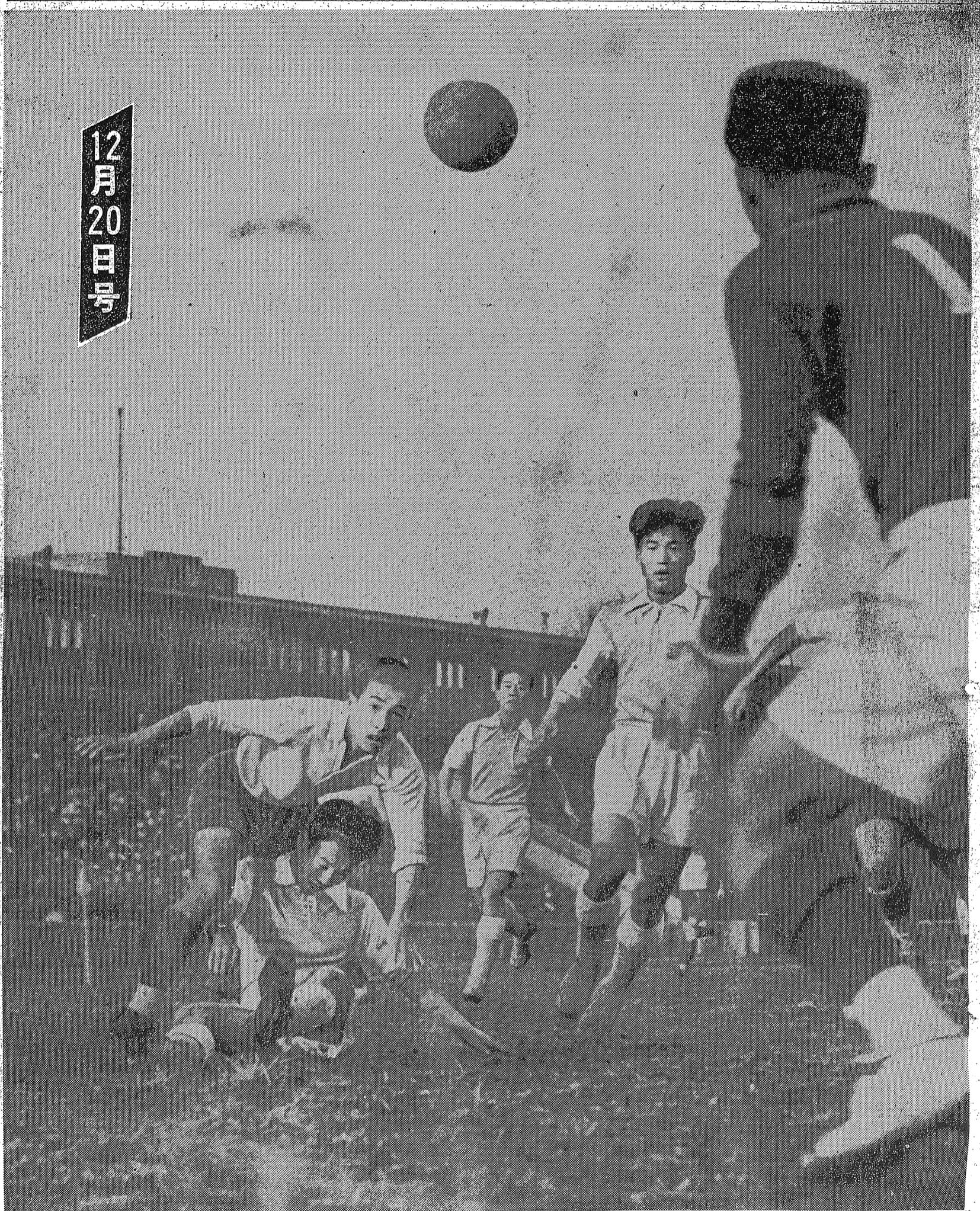
昭和22年1月10日 昭和24年2月25日 日本国育  
第3種郵便物認可 発行特別承認新聞第175号  
昭和27年12月7日発行 第807号

発行所 東京本社 東京都千代田区有楽町2丁目3番地 電話(20)131  
大阪本社 大阪市北区中之島3丁目3番地 電話(23)131  
朝日新聞 西部本社 小倉市砂津字富野口北380番地ノ1 電話 2781

定価 100円

S  
27  
・  
12  
・  
20

12月20日号



## 重松(慶大)のシュート成らず

### 東西学生サッカー王座決定戦

東西学生サッカー一位対抗慶大対関学戦は前半1対1のタイスコアのあと関学ゴールへ猛攻を続けた慶大は、右サイドからボールを受けたCF重松(左端)が関学ゴール前七、八米处に迫り、シュートに移った。関学の危機!しかしその時逃走した関学CH佐

々木(転んでいる)がスライディング・タックル、このためボールは関学キーパー生駒(背番号1番)の正面に上った。生駒はチャージに飛び込もうとする慶大FW(生駒の向うに足と手だけがみえる)をかわして危機をのがれる。中央バックアップを急ぐは関学LH岡本(手前)LB志井。

14日・神宮競技場にて

中井写真部員撮影

# 学生サッカー一位對抗戦

戦評 座談会

二十七年東西学生サッカー一位對抗戦は、十四日午後一時五十分から神宮體育場で挙行。慶応は好調な試合振りをみせたが、関学はシーズン初の調子にもとらず生彩を欠いて苦しい試合振りとなり、慶大が関学最後の追撃を堂々振り切つて優勝、東西学生の王座を握った。これで慶大の優勝は五回目、関

## 慶大、晴れの王座へ 不調に終つた関学FW

### 慶大3-2 関学2-1

【関学】  
駒木 本木 藤村 沼谷 田中  
生 平志 岡佐 佐本 長崎 村徳  
GK B B B B B B B B B B  
FW H H H H H H H H H H  
10 12 8  
10 12 8

大谷 慶応FWでLW松沢とR1岩淵二人の故障者を出し、右陣に苦心してつらしたが、O F重松、RW鈴木と攻撃のキープメントを動かさなかったのはおかしなところだ。  
竹腰 重松がRW、鈴木がOFも考えたが、鈴木はワインクだと割きまく、結果的に鈴木とセンターより重松の方がよかった。彼が一人で得意とする強さはなかったが、RW鈴木への球はききで成功していた。  
大谷 攻撃コースとしてはやはり右側鈴木からのコースがチャン



東の17勝8敗の成績となった。本紙ではこれを機会にこの日レフリーをつとめた日本蹴球協会ヘッドコーチ竹腰重丸(東大OB) 同コーチ川本泰三(早大OB) の両氏を招き、本大会優勝部サッカー担当の大谷記者と座談会を開き、慶大の戦評と今シーズンの学生サッカーを願ひて話を聞いた。

スすれば徳弘がゴール前で決め手として活躍出来る場面がこれまで多かったわけだ。その点きょうの慶大は木村のおかげで大いに救われた。(笑) といつては悪いかな。とに角関学FWはキープが出来なかったが、長沼一入がキープ出来たが、長沼一入は、長沼の動きは前後に強いといわれるが、きょうは前半はじめにO F岩淵からパスを受け、中央を割りかけた時の鋭さと、後半最後の方にみせた以外は守備を切つたが、退り過ぎてそれ

大谷 長沼の動きは前後に強いといわれるが、きょうは前半はじめにO F岩淵からパスを受け、中央を割りかけた時の鋭さと、後半最後の方にみせた以外は守備を切つたが、退り過ぎてそれ

大谷 小坂井はオーバードライブでFWに故障がなければこの試合に使われないといっていた位だ。次に関学へ移る。

【関学】  
駒木 本木 藤村 沼谷 田中  
生 平志 岡佐 佐本 長崎 村徳  
GK B B B B B B B B B B  
FW H H H H H H H H H H  
10 12 8  
10 12 8

いた。LWからクロスしようになつても横谷から右が寄せていないし、これまでだった横谷が軽くはらうパスを彼が切つて攻撃姿勢を整えたが、その動きがみえなかった。  
川本 いや、長沼は対関大戦よりよいし、きょうの試合も悪くないよ。  
大谷 では、この試合のわかれ目は……。  
川本 慶大FWがよかったと球がきき早く、割合大ききボールを動かしたことが、  
大谷 関学は悪いグラウンド。コンディションに悩んでボールを足もとに押えることに懸命になつては時を浪費していたようにみえた。慶大は鈴木をはじめ球を動かしたままではいけないところにも差がみられたね。  
川本 そうして慶大は連通りのコースをとつてきれいに攻めた。しかし、そのあとが押し込みやそれに近いヘディングばかりで

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)



左端 竹腰重丸氏 川本泰三氏  
大谷記者 日本蹴球協会OB、元オリンピック選手

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

大谷 関学としてサイド・ハーフが全クシヨンに浮いてしまつて、中盤を完全にリードされたことは見逃せないと思う。従つて長沼も退屈はならなかった。バックスと攻撃第一線の間には大きなミソが出来、慶大のハーフと早川あたりにほとんどボールを奪われた。  
川本 関学には彼があつて、後半点を奪われた時は最も悪く、中盤で十割慶大に奪われた。  
竹腰 バックスは五分五分で、ただサイド・ハーフで慶大に奪がられた。  
川本 バックスはともにも弱い。これはクリヤーの悪くした。ミスはスキップの多いこと、グラウンド・コンディションを考慮しても過言である。  
大谷 結局FWの差ですね。  
川本 慶大は新人酒井まで十分働いたのに、関学は長沼を除いて、横谷が前半に好プレーを三回四回、徳弘も前半はよかったが、後半にはともにダメになつた。(写真参照)

※左ページへつづく

見えぬ進歩の跡  
充実味のない練習内容

大谷 次は今シーズンを慶大で昨年までと比べると……。  
川本 特にどうともいへない。このころはずっとパスが通らなくなつたことでも進んだわけだ。  
竹腰 FWプレーはよくなつていゝね。慶応のFWは確かに進歩した。しかしバックスは進歩してない。  
川本 そうだ。もっとバックスにいい選手が出てほしい。試合を観るとバックスのミス・キックが実に多い。それは球が巨もへ来ようとして、横へ来ようとして、高く浮いていようと同じり方をしている球の変化に応じてケリ方が変化してない。プレーの幅がないといふことだ。バックスのクリヤーした球がパスにならずにキックしたといふこととまる程度で、これもバックスがまずいことだ。  
大谷 昨年のスウェーデンの来日が大変な刺激だったと思うが、あのチームから学んだことが実際のプレーに出て来ていますか。  
川本 まだ出て来ていません。

大谷 昨年のスウェーデンの来日が大変な刺激だったと思うが、あのチームから学んだことが実際のプレーに出て来ていますか。  
川本 まだ出て来ていません。

大谷 昨年のスウェーデンの来日が大変な刺激だったと思うが、あのチームから学んだことが実際のプレーに出て来ていますか。  
川本 まだ出て来ていません。

※右ページからつづく

# 巧い審判が欲しい

大谷 オリンピックやヨーロッパをきて来て内地の学生サッカーをみた感じは、  
竹腰 比較となるとどういふね。要は基礎技術をもっとやらなければいけぬ。スピードで走るシニート・ボールも猛烈だ。だからいまの欧州に反抗しようと思えば、技術とともにエネルギーも要る。ベルリン・オリンピック臨時よりもっと激しい動きが必要だ。さう。

大谷 外国の試合を観た人が日本のサッカーはゴセゴセしているところだが……  
竹腰 確かにそうでしょう。動きの激しさと技術がマッチしなればならぬ。動きが激しければ先走ったとせわしくなるだけですよ。

川本 早い話がゲタを突っかけて表へ飛び出したという感じだね。スウェーデンなどはちやんとクツをはいていきますよ。(笑)  
大谷 竹腰さんはスイスで審判講習会へも出席されたということですが、これまで日本で知らなかった新しい点、規則の解釈に疑問があったがはつきりしたというところを……

竹腰 オフストラクションが明かに文字に表わされたこと。きょうの試合でも相当あったが、もっと厳重に……  
(注) オフストラクションとは妨害のこと。自分がボールをプレーする意思なく相手のプレーを邪魔すること)  
川本 ルールの文字には出ていないが、それは昔からいけないう。最近はずいぶんなっているのだ。審判にも責任はある。

竹腰 スローインは頭の上を通る二動作であれば地面にたたくだけでよい。もし一つは判定ゴールが全くない。反則があろうと、ゴール・ラインを球が通過しないと絶対ゴールインとしてはならないというのだ。ハンドは故意

でない反則としてはならぬ。トラッピングをしなくてはならないのはハンドを取つてよ。(注) 判定ゴールとはゴールラインになるまでのボールを故意にハンドなどで止めた場合日本ではゴールインと判定してはた)  
大谷 日本では左手に触れれば、ハンドの音が掛るが、あれは主審の判定にまかされてはいけません。

竹腰 背後からのチャイムも自分の肩で相手の肩にしなければならぬ。  
川本 要するにボールを先にとるものに有利なわけだ。  
大谷 バックスとして早く飛び出せばいいわけだ。

竹腰 一般に日本のルール解釈は間違っていない。ただ適用がむずかしい。日本には全然にうまく適用出来る審判が少ないのだ。  
川本 審判はもっとよくならないか。関係しては関係ないが、治君(岡野)が巧かった。

大谷 最後に学生サッカーに与える注意を願います。  
竹腰 全般に練習不足だ。というの時間が少ないことではない。時間の割に内容が充実してないのではないか。

## 東西OB陣容決る

東西OB陣容決る  
一月十日、十一の両日、西宮で行われる第一回朝日招待サッカー大会には、関東から第一位の慶大と関西OB選抜隊が遠征し、慶大対関西OB選抜隊の二試合が行われるが、関東、関西OB選抜隊のメンバーは次の通り  
関東OB監督 松本茂雄(慶大) マネージャー 横山陽三(慶大) W 加納孝(早) 二宮洋一(慶大) 加藤謙(神奈) 松永慎(早) 竹村謙治(立) 高橋敏彦(東) 小久保俊二(早) 川神生(東) 加納浩純(京) 松田久(関学)

大谷 この夏方々の合宿をみた感じもそれで、形式に流れて、この練習は何を目的としているかを一人一人がしっかりとつかんでない感じがした。  
川本 余の手を動かさないことだ。一つのことに数をかける。ウィングなればまずセンターリングを百本も二百本も繰り返してやることだ。  
大谷 基礎技術をもっと教けてやれ、でしょう。  
川本 それなんです。学生はいつまでたっても基礎技術がどうも思わぬかも知れないが、いつまでたっても基礎技術が、というところが本当なのだ。基礎技術といふはまずトラッピングだが、きょうの慶大と関学の試合をみて、トラッピングしても球の行方は球に閉じて下さる(笑) という調子だ。トラッピングしたら同時に次のプレーに半分入っていないのはならない。

竹腰 練習を充実させるのも気力だ。シニートの時に相手に近づくともう逃げ腰でシニートしているのを、きょうも近くから見よ。  
川本 シニートは近くに相手は来るほどもう逃げたのだよ。せまう間をキをぬらうところに関学がわいて来しものだ。

大谷 もっと試合をよく見よといいたいですね。すばらしいシニートをした場面はやはり感心しない。なせいいプレーが出来たかの経路をみることも大切でしょう。  
川本 いいプレーをみて感ずるだけでもいいのだがね。  
竹腰 試合を見ることは大切だ。いまの日本代表チームが接戦するか、負けるかという外国チームを招いて試合すれば、非常に面白い試合だし、学生に役に立つと思う。それから、いつもいふことだが、スポーツマンとしての節制もいまは足りぬ。ユニホーム姿でタバコを吸うなどは恥かしいよ。

川本 一つのことを伸ばしてほしい。各校にもそれぞれコートがおられると思うが、コートなんていうものは大体備極的な存在で、あれもこれも教えないで、選手だけの素質が伸びるようには邪魔を除いてやるのが役目だ。関学の木村、長沼や慶大の鈴木はそれもまだまだのびる選手だ。  
竹腰 英国のアール(有名なプロ・チーム)のマーサー主将は三十七、八歳のサイド・ハーフを引っかいているから学生諸君はまだまだ望みがあるわけですよ。

明大勝つ 対関大 定期戦  
第六回明大、関大サッカー定期戦は十四日午前十時から神宮競技場で挙行、明大が快勝して三勝三敗の成績となった。  
明大 4-2-1-0-1 関大  
【明大】 田代孝由(田) 広藤孝(神) 川邊 島(神) 秋前西直三(末) 伊信(京) GKFBHB FW KKKK CGFP 上岡藤樹(山) 藤野(井) 20100 松本茂雄(石) 大神龍(新) 【関大】

大谷 この夏方々の合宿をみた感じもそれで、形式に流れて、この練習は何を目的としているかを一人一人がしっかりとつかんでない感じがした。  
川本 余の手を動かさないことだ。一つのことに数をかける。ウィングなればまずセンターリングを百本も二百本も繰り返してやることだ。  
大谷 基礎技術をもっと教けてやれ、でしょう。  
川本 それなんです。学生はいつまでたっても基礎技術がどうも思わぬかも知れないが、いつまでたっても基礎技術が、というところが本当なのだ。基礎技術といふはまずトラッピングだが、きょうの慶大と関学の試合をみて、トラッピングしても球の行方は球に閉じて下さる(笑) という調子だ。トラッピングしたら同時に次のプレーに半分入っていないのはならない。

竹腰 練習を充実させるのも気力だ。シニートの時に相手に近づくともう逃げ腰でシニートしているのを、きょうも近くから見よ。  
川本 シニートは近くに相手は来るほどもう逃げたのだよ。せまう間をキをぬらうところに関学がわいて来しものだ。

大谷 もっと試合をよく見よといいたいですね。すばらしいシニートをした場面はやはり感心しない。なせいいプレーが出来たかの経路をみることも大切でしょう。  
川本 いいプレーをみて感ずるだけでもいいのだがね。  
竹腰 試合を見ることは大切だ。いまの日本代表チームが接戦するか、負けるかという外国チームを招いて試合すれば、非常に面白い試合だし、学生に役に立つと思う。それから、いつもいふことだが、スポーツマンとしての節制もいまは足りぬ。ユニホーム姿でタバコを吸うなどは恥かしいよ。

川本 一つのことを伸ばしてほしい。各校にもそれぞれコートがおられると思うが、コートなんていうものは大体備極的な存在で、あれもこれも教えないで、選手だけの素質が伸びるようには邪魔を除いてやるのが役目だ。関学の木村、長沼や慶大の鈴木はそれもまだまだのびる選手だ。  
竹腰 英国のアール(有名なプロ・チーム)のマーサー主将は三十七、八歳のサイド・ハーフを引っかいているから学生諸君はまだまだ望みがあるわけですよ。

明大勝つ 対関大 定期戦  
第六回明大、関大サッカー定期戦は十四日午前十時から神宮競技場で挙行、明大が快勝して三勝三敗の成績となった。  
明大 4-2-1-0-1 関大  
【明大】 田代孝由(田) 広藤孝(神) 川邊 島(神) 秋前西直三(末) 伊信(京) GKFBHB FW KKKK CGFP 上岡藤樹(山) 藤野(井) 20100 松本茂雄(石) 大神龍(新) 【関大】













# 世界一流のクラス

## オッフエンバッハ・キッカーズ

日本蹴球協会では来月、西独の二強チーム、オッフエンバッハ・キッカーズを招いて別項の日程で日独交歓試合を行うと発表された。

このチームはモーター会長以下役員四名、選手十六名から成り五月十七日フランクフルト発、バンコック、マニラを試合し六月五日羽田着、約十日間日本に滞在する。

日独サッカーの対戦は、ベルリン・オリンピックの時練習試合を行っていたが、公式試合は今回が初めてである。

オッフエンバッハ・キッカーズは南独フランクフルトの隣接都市で有名なオッフエンバッハ市(人口

### 来日する独サッカーチーム

このチームはモーター会長以下役員四名、選手十六名から成り五月十七日フランクフルト発、バンコック、マニラを試合し六月五日羽田着、約十日間日本に滞在する。



オスワルト



チンマーマン



シュライナー



カウフホルト



フラインゼン



ウェーバー

このチームの世界サッカー界におけるレヴェルは、昨年オランダで優勝したハンガリーと同等であるといえる。これを迎える日本サッカー界が、この世界一流の水準に達したチームにどの程度敵えるかというところは、日本

欧州におけるこのチームの最近の戦績は一九五二年、スウェーデンに遠征し、ヘルシンキボリユと並び称される一流チーム、マルヌを破り、その他五勝一敗している。同じ年に英国のプロリーグの優勝候補マンチェスターを破り、このチームは五二年にイスイス代表として対ラジル戦で伝説的なドイツ

サッカーで破りスペイン、パロセロナ・チームには接戦の末、3-0で敗れている。この戦績を見ても先ず世界の一流クラスに属することは間違いない。

昨年のヘルシンキ・オリンピックで西独代表チームは第二回戦の対ラジル戦で伝説的なドイツ

のサッカーのレヴェルを知る意味に於いてまことに興味深いものがあるといえる。

しかも一昨年のスウェーデンのヘルシンキボリユ以来の久しぶりの強敵である、というよりむしろ恐らく一勝も成し得ないだろうと想像される。しかし来年のアジア大会及び次期メルボルンのオリンピックをひかえ、日本サッカー界の更に一層の奮起と精進が望まれる時、同等の強さのチームを迎える以上、サッカー界に及ぼす好影響と試合の面白さがある事も見のがせないし、まことに有意義なものであるといえる。

独チーム日程

- 五日 羽田着
- 六日 はとで大阪へ
- 七日 対全開学(西宮)
- 八日 京都、奈良見物
- 九日 はとで京都(東山)
- 十日 休養
- 十一日 対全日本学生(神戸)
- 十二日 東京見物
- 十三日 休養
- 十四日 対全日本(神宮)
- 十五日 休養
- 十六日 羽田発(キースタン)

全日本軍 六月十四日神宮

メンバ 競技場オッフエンバッハ・キッカーズと対戦する全日本選抜軍のメンバは次の通り。

▽キーパー 津田(慶大出) 下村(修道高出) ヴァックス 松本教大出(関学出) 大越(東大出) 宮田(早大出) 加藤(東大出) 岡田(早大出) 村田(早大出) 土井田(慶大出) ヴァンフォード 川本(早大出) 二宮(慶大出) 鶴

田(関学出) 賀川(神大出) 木村(関学出) 岩谷(早大出) 加納(早大出) 鈴木(慶大出) 小林(慶大出) 徳弘(関学)

八月九日から西独サッカー西 八月九日から西独独派選候補 ドルトムント市で開催される第二回国際学生競技大会に参加するサッカーの代表候補が次の通り発表された。

▽監督 竹腰重丸(東大出) ヴァンキーパー 村岡(教大) 玉城(立大) ヴァックス 平木(慶大) 山路(早大出) 山口(明大出) 井上(関学出) 三村(中大) 小田島(早大出) 若田(関大) ヴァンフォード 木村(関学出) 鈴木(慶大出) 小林(慶大出) 長沼(中大) 岡野(東大) 高林(立大) 寛(関大) 徳弘(関学)

▽補欠 生駒(関学) 土井田(慶大出) 石川(明大出) 大村(立大) 村田(関学) 重松(慶大) 新先(同大)

## たった一度の自殺

……ドイツで試合したころ……

堀江忠男

六月に来るドイツのサッカー・チーム、オッフエンバッハ・キッカーズの前が朝日新聞に出ている。そのなかで、私の注意をひきつけたのが、コーチのバル・オスワルトの経歴だ。バル・オスワルトはベルリンに出場したドイツ・チームのメンバで、その後ベルリンにある著名なサッカー・クラブ、ミネルヴァの名手として知られた人だと書いてある。

日本チームはベルリンではドイツ・チームとは対戦しなかったが、その試合は見に行きた。だから私はオスワルトという人のプレーを見たに違いない。その上、ミネルヴァといえば、われわれがベルリンへ着いてから大金を手に取った三つの練習試合のうち、二番目のときの相手チームの名前だ。

私の記者写真帳を開いてみる

六月に来るドイツのサッカー・チーム、オッフエンバッハ・キッカーズの前が朝日新聞に出ている。そのなかで、私の注意をひきつけたのが、コーチのバル・オスワルトの経歴だ。バル・オスワルトはベルリンに出場したドイツ・チームのメンバで、その後ベルリンにある著名なサッカー・クラブ、ミネルヴァの名手として知られた人だと書いてある。

日本チームはベルリンではドイツ・チームとは対戦しなかったが、その試合は見に行きた。だから私はオスワルトという人のプレーを見たに違いない。その上、ミネルヴァといえば、われわれがベルリンへ着いてから大金を手に取った三つの練習試合のうち、二番目のときの相手チームの名前だ。

私の記者写真帳を開いてみる

六月に来るドイツのサッカー・チーム、オッフエンバッハ・キッカーズの前が朝日新聞に出ている。そのなかで、私の注意をひきつけたのが、コーチのバル・オスワルトの経歴だ。バル・オスワルトはベルリンに出場したドイツ・チームのメンバで、その後ベルリンにある著名なサッカー・クラブ、ミネルヴァの名手として知られた人だと書いてある。

日本チームはベルリンではドイツ・チームとは対戦しなかったが、その試合は見に行きた。だから私はオスワルトという人のプレーを見たに違いない。その上、ミネルヴァといえば、われわれがベルリンへ着いてから大金を手に取った三つの練習試合のうち、二番目のときの相手チームの名前だ。

私の記者写真帳を開いてみる

と思われていたのに、後半十五分を余すところから俄然四、三、三システムをくずしてハーフも攻撃に加わり、延長に持ち込み四対二で勝った。この気力のすさまじさ、精神力の強じんさはドイツチームの一般的な一大特色である。

平均年齢二十二歳の若さであるこのチームの見所は、四、三、三システムを日本に対して用いるかどうかは分らないが、防御を主とし、未知の相手に対して緒戦を堅実に一応相手の実力を値のみする場面に用いられ、機を見て五、二、三または六、一、三に変化するこのシステムは理詰めの消極的戦法ではある。しかもこのチームの名手はシュライナー主将を中心とした各個人の守備範囲は広く守備のチームであるといえる。従って二攻の不利はまぬかれないところであろう。しかしドイツのチームについて一般的に用いられるこの二十年來変らぬシステムもこのチームの場合攻撃に際し岡ウイングの国際選手RWカウフホルト及び百以十秒台の快足のチャンス・メーカー、LWウェーバーがCEフラインゼンデルフアーの長身と相まって攻撃の不利を補って余りあると考えられる。

これは五月二日から京都で行われた全日本選手権の試合を観たオッフエンバッハのマネージャー・シヤフナー氏の日本チームに対する評価スピーチもあり、ストップも上手で、良く動くし体力もある。しかしヘッドテイングが弱い」という言葉からしても、このCEフラインゼンデルフアーの1.85の長身は恐い存在。特に彼の過去に得た

更にピカ一はGKチンマーマンであろう。身長1.95(六尺四寸)の彼は昨年チエリッヒで行われる世界選手権大会の有力候補であって、低い球に対しては強いのジャンプ力を利用して確実と聞く。日本チームが一点も取れない公算大である。

チームの顔ぶれは次の通り

▽GKチンマーマン(24歳、機械工) ヴァンバーエンバウカ(21歳、パン屋、国際選手)

L B マーゲル(18歳、父のオッセル業助手) ヴァンバーエンバウカ(19歳、体育教師、国際選手) C H ケンメラ(21歳、機械工) L H カイム(26歳、公務員) シュミット(24歳、農業) ヴァンバーエンバウカ(25歳、公務員、国際選手) R I クラウス(19歳、電気工) シヤフナー(20歳、公務員) O E P フラインゼンデルフアー(26歳、皮革工、国際選手) E I ワーテ(19歳、高校生) パース(21歳、体育教師) L W ウェーバー(28歳、煙草工、国際選手)

# アサヒスポーツ

S  
28  
・  
6  
・  
13

ASAHI SPORTS

毎週土曜日発行

昭和23年1月10日  
第三種郵便物認可  
編集人 富永正信

昭和24年2月25日  
郵政特別取扱新聞第175号  
昭和28年6月13日発行 第833号  
発行兼印刷人 香海鏡男

発行所  
朝日新聞

東京本社 東京都千代田区有楽町2丁目3番地  
大阪本社 大阪市北区中之島3丁目3番地  
西部本社 小倉市砂津字富野口北3-8-0番地

電話(20)131  
電話(23)131  
電話 2781

定価 15円

6月13日号



## 強引なヘッディング

西独キッカーズ、関学クに快勝

西ドイツに古い伝統を持つオップェンバッハ・キッカーズ・クラブの来日第一戦、対全日本選手権保持者関学クとのサッカー試合は七日豪雨下に数千の観衆を集めて西宮球技場で行われた。オップェンバッハはヘッディング・シューターとして呼声高いCFブライゼンデルファーにボールを集め、彼は聞きしにたがわぬ鋭いヘッディングをしばしばみせたが、関学クGK生駒も健闘して危機をよく救った。写真は二人の攻防をとらえている。前半20分オップェンバッハは右にCKを得て、そのキックをCFブライゼンデルファー猛烈なジャンプでヘッディングを試みたが、GK生駒パンチでよく防ぐ。右からRB平木(背番号2) 背番号1がGK生駒、その陰に脚のみえるのがCFブライゼンデルファー、その左RH柴田、RIクラウス、CH杉本。

—7日・西宮球技場にて 岡本写真部員撮影

# 西独キリ 第一戦に勝つ

## 台風、豪雨下の熱戦

### 5-1 関学クの善闘及ばず

西ドイツのサッカー・チーム、オッフェンバッハ・キッカーズ・クラブは五日夕方陸路マニラから羽田へ、モーリー会長以下十八名の一行は六日西下して七日午後二時から台風の通過する豪雨の中に西宮を全日本選手権の優勝チーム関西学院クラブと対戦した。エンジのシャツ紺のパンツ黒に二本の細い赤線を入れたストッキング姿のベスト・イレブン旅の疲れもない

かのように定期十分前グラウンドに現われ、センターサークル上に陣をつくっての挨拶もききびと試合に臨んだ。聞きしに優る強敵チーム振りて雨の中の最悪のグラウンド・コンディションながら身についていた優秀な技術を随所にみせて終始攻勢を保ち5-1で第一戦を飾った。(主審・市橋、観戦・安原、皆木)

## 完成された個人技

### 好天下の試合運行が見物

台風の子報が出ていたが、連来西独蹴球チームの試合振り如何と西宮球場へ赴いてみると、グラウンドは全く水たしで、あたかも水田のようである。雨はますます降りつづいて来る。

二時、土砂降りの雨中で関学キックオフ。5-1-0-1 関学ク

ツク・オプ。風は南から吹いて、風上の関学直ちに駿足のFWを敵守りて極力内から外へと相手の攻撃を返している。悪条件下の田圃のような水溜りの中は関学得意の速攻も妙な結果も発揮出来ず、西独チームを期待されたフォーメーションの見事さを誇るわけにはゆかず。双方未知の相手に慣れないままに一進一退、キックの連続で試合のレベルは低からざるを得ない。10分を過ぎるところから次第にオッフェンバッハの球の回し方が次第にはまってくる。キックの脚力が強い事、時宜を得たトウキック、優れたヘッドイング、分厚な身体でのカバリーなど個人的な力量の相違で、球を味方に確保して、関学ゴール前を掃さるり始めた。ボールがゴールに当たったり、ポストに跳ね返ったり、シュートはいずれもゴールのワケから余り外れないわいどだが、守る関学バックも出足はなはだ鋭く、よきタックルを決め、及ばぬ時でもはたせり、シュートを許さない。ベルリン・オリビックの対スウェーデン戦同様強い圧迫を加えつづけていられる。西独はLが少し下り目に位置する場面もあるが、ほぼW型の陣形を攻めるのに対し、関学はベナ

ト、右陣に決ったわけだ。この関学バックスは左右に振られつづけたあとにちよっとの間、一回突立ち気味で防がねた格好、しかし依然元気に応戦している。

33分、中央線で相手の球を得た関学は中央からDFが出て左へ回す。LW徳弘が例の如く突進しながら受けて直ちに返すとゴール前は無人となつて、DF轟田のフツシュで成り同点。これは西独のRBと関学LW徳弘の競り合いで徳弘が隣一步先にした結果で、関学の元気を物語ると共に、オッフェンバッハのバックスもいさか手を抜いた感じもした。

同点となつて観衆もわいたが雨音のために余り響かない。妙な光景である。とにかく水溜り十分に吸った赤い二重着が、水が「くるくる」を流す所さえあつては球さばきは極めて難渋である。西独の守備は完全な3B制で、両DFは籠籠に陣を張り、中央線付近でまず関学のインギン・フォワードをチャージして抑え込んでしまふ。そのため関学脚足の両翼も面目を發揮出来ないままに攻めかねて居る。

後半は文字通り豪雨となつて来た。雨の中のゲームは呼吸こそ楽だが身体はひどく疲れるので、乾燥した固いグラウンドになれば、軽いプレーの得意な関学チームには後半苦戦を予想して居る。

これに反し西独は前半もそうであつたがいよいよオールドツクスな球の処理、即ちくるぶしを当てるサイド・キックや足音のスツップを効かしての浮き球、ウォーター・ボロのような不都合になったグラウンドで球を正確に味方に保持してゆく。キックが強いので、水の妨げを排してパスが出来るといふものである。従つて、闘合展開したままにボールをキープしながら攻めることになる。しかし花やかな攻撃を見ることができず、まことに運の悪い日である。

後半の第一点は西独左サイドの中央送球を関学LB処理を誤り、ためらう所をDFIがタッシュ、きれいに左陣へ決める。これからは前述した通り体力と基礎技術の差で、ボールはハーフ・ウェイから西独陣へ運ぶことがなく、関学の一方守りに終始することとなった。関学のインサイドが下つたので狭いエリアに十四、五人もいる勘定になる。ドリブルも水に阻まれさすがにたくましい西独の連中もやはり難く妙な顔付だ。

【交代選手】才軍は後半RBエンバガー退きシュミットが入り、RIクラウス退きRWカウフホルトがRIとなり、新たにキルハイがRWに入る。なお観戦試合では慣習上両チームの試合によって二三名の交代が認められている。

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354

【オッフェンバッハ】  
RB 4716  
LB 4716  
DF 1354  
FW 1354



試合中、関学選手がボールをコントロールしている様子。背景には観客席とスタンドが見える。

ゴール前で激しい争奪戦が展開されている。選手たちの足音が響き渡る。

試合終了後、選手たちがベンチに戻り、コーチと話し合っている様子。

試合後の記者会見で、選手たちが自身のパフォーマンスについて話している。

試合の模様を伝えるための写真撮影が行われている。

# 日独交歓サッカー終る

## キッカーズ三戦全勝

### 最高水準のプレー展開

日本蹴球協会の招きに応じて初めて日本を訪れた西ドイツのサッカー・チーム、オプフェンバツ・キッカーズは六月七日の西宮での対全開学学生を皮切りに三戦全勝の戦績を残し、十日夜羽田から次の試合地カタヘ向った。

七日の全開学学生を5-1、十一日には東京の神宮で全学生の手組外の活躍にあつたが、十四日には同じく神宮で全日本軍を9-0と壊滅し圧倒的な強みを示し、一昨年のスウェーデンのヘルシング・ボリーユ以来、久しぶりに本場の

## 強力なハーフバック

### 多彩なパスで西独大勝

#### 全日本

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍は前二試合でみごとくある種ボールを持って走らせようとした。そのためにこれは正確なパスを繰返しながら徐々にゴールへ迫る攻撃態勢で試合は始つた。しかし全日本も個人の抜かれたパス・ワークは前試合の学生軍よりは止なので、4分過ぎにはLW加納・CF岩谷と渡り、岩谷ゴール・ライン近くからセンターリングを送ったのを初めとしてLW川本からLW加納へ二層ほどRBを抜いた好パスが送られた。20分には中央線あたりでオ軍RBエンバガーがハンドした時、球は日本軍に渡つたのでホイッスルは吹かれなかつた。加納・岩谷と渡つて岩谷シュート（これは弱くGKの前マシエロとなるが）二層ほどRB・HB柴田（関学OB）

オ軍の浅い守備陣  
オ軍のフォーメーションはほぼWMシステムである。つまり日本の3F体制のそれと大分異なっている。CFを占める浅い守備陣に二線をなすいわゆる浅い守備陣である。HBラインは左右の二人で形成しているが時折LHがその間に入つて来ることもある。このような時には期待された4・3・3のシステムがなるともみられたが、決して終始とられた型ではなかつた。日本の攻撃が判断してそのような型をとる必要がなかつたかも知れない。最初の対開学学生の試合の方がそれらしい型はよりみられた。これは初の試合で全日本選手権者という相手の力に見当が付きかねたために、慎重な試合をしたためとみられる。

崩れた日本の守備  
後半全日本はLB岡田、LH大柴を退け、RB土井田、LB加藤、LH柴田とした。新守を加えたが、RB土井田は前試合の疲労が抜け切らないようでもあり、一方オ軍の攻撃がいよいよ上に入つて来たので、折角の新守も意味を加えようもなかつた。11分CFキルハールのシュートはRB土井田の好ゴール・カバーで辛くも助がしたが、14分LWアデのパスを左から受けたR・クラウスが中央を抜いて第三目標を挙げた。全日本バックスはオフサイドをどうとしか一瞬立ち、LBは前進し過ぎ、LHはクラウスを難し過ぎたクラウスのダッシュに破られたのである。

こうして総攻撃の火フタを切つたオ軍は、21分にはRHシユライナーからボールは左へ左へと渡りLWエーバー返してCFキルハールが決め、28分にはクラウス、29分にはカワフホルトのヘッドリング、33分にはRWに代つていたクラウスの好センターリングをLWアデ、35分にはクラウスのヘッドリング、40分にはまたクラウスと矢継ぎ早に得点して文句なしの大勝となった。

期待外れの全日本  
全日本は後半も終りに近づいたころに攻撃に出、LH川本、RH岩谷が競って相手ゴールを破りシュートとみえたがバックス、あるいはキーパーの早い寄りにつぶされてあえなく敗れた。もう少し期待されたいが、全日本はいささか期待はずれだったが、相手OBばかりのこのチームはもう少しきびしい動きを失つていた。スピードと力強さに欠けていた。日本流のシュート・パスも通用しなかつた。相手は日本チームならば面白いように通るそのセンター・スリーのパスだが、オ軍バックスの判断はパスを二つを統合せないほど速くカットした。彼らのような選手を相手としては全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな

し得る角度は余りに狭すぎる。オ軍の選手は一度球を持っては、でもパスが送れるように数の味方は一斉にフリーな位置をどうと動くこと、球を持つ選手の四方へけられるような自由な身のこなしが全開して、その多彩なパスワークが生れている。しかし日本チームの場合はいささか味方の動きが鈍い程度で、球を持つもののパス可能な角度もせいぜい九十度くらいしかみえない。この差はいささか大きな差として全日本軍個々のパスをな



対全学生戦前半30分、ドイツのゴール前の守備体形、五人バックスのディフェンス。日

関西の第一戦を終つた西独チームに対する評価は、伝えられたとおりとすれば、一昨年来日したスウェーデン・チームのそれを上回り、オリンピック

破れず、あせりも一もい学生軍意外な健闘に終つたのである。そこでまた、こういう評価が飛出して来た。それは「個人技、チーム力とも日本より一校上手の事実だが、全然頭が立たない相手にはななな」とまた、第一戦後の評価に対する「それほどではないだろう」という再評価が三戦によって、これらの評価は、再の提出にもなりそうだし、もてるまでにはいかなくても「スウェーデン・チームとは本質を異にするチーム」という説明に活路を求めるようである。ともかく、それによって全日本学生の健闘が再確認されたというのは皮肉である。

キッカ 20000 全日本  
1ズ 20000 全日本

西独派遣選手決る  
八月九日から十六日まで西独ドルトムント市で行われる国際学生競技大会に派遣するサッカーの日本代表選手が十四日日本蹴球協会の事務所で発表された。

- 監督 竹腰重丸 (東大出) W助
- 監督 松丸貞一 (慶大出) マネ
- 監督 大谷四郎 (東大出) Wプ
- 監督 奥野良一 (関学出) 鈴木
- (教) 玉城良一 (立大)

- 徳衛 (慶大出) 小林忠生 (慶大出)
- 長沼健 (中一) 岡野俊二郎 (東大)
- 高林隆 (立大) 寛見 (関大)
- 徳弘隆 (関学) マバツクス 小田島三三助 (早大)
- 三村格一 (中一) 山田昭一 (明大出)
- 岩田淳三 (関大) 井上健 (関学)
- 山崎修 (早大出) 平木隆三 (関学)
- マキバ村岡博人 (教)

※左ページへつづく



西郷ツカサ・チームは日本チームと三戦して素晴らしい技量を見せ、日本選手に学ぶべき多くのものを残していったが、本紙はモーター・チーム、シムライナー・チーム、シムライナー・チームの三氏を招いて、元オリンピック・サッカー選手堀江忠男氏に、日本チームの田舎の地を聴いてもらった。

堀江 ドイツを先づ前に日本のサッカーについて、どの程度御存じですか。

モーター なじしろ、地理的に余りにも離れているので日本チームがオリンピックに出場するとか、なにか新聞に書かれたりするよりなにかもあれば、多少はわかるのだが……。まず予備知識はなかつたといふことよ。

モーター たし、モーター、シムライナーの両氏、おまのこの座談会には出なかつたが、ゴイチのオスワルト氏など、相対な年輩の人には一九三三年のベルリン・オリンピックに出た日本チームのことはよく記憶していらした。

**学生軍が一番良い**

堀江 日本で行った三試合についての率直な感想を。

シムライナー 学生選抜が一番良いチームだった。全開でくらべたら、学生選抜の方が二割方強いといふところがある。全日本が一番弱かったが、その上、聞いた(注)積極的に展開し、攻撃的な、という意味、戦法を採ったのが誤りだった。

モーター 相手がずっと強いと

**キッカーズに三氏に聴く**

日本チームと対戦して



イシヨンをいかに作りあげるか、というところだ。このイシヨンとイシヨンの関係は、少し大げさな方を許してもらえば、日本チームとも、最初の二十分くらいは満足に動けるが、あとはガタガタだった。

堀江 日本側では、オツペン

**悪い神宮競技場**

モーター それは誤解です。われわれは九十分間一生懸命やっています。ただ、最初の十分は、グラウンドに慣れる必要があった。グラウンドに慣れる必要があった。グラウンドに慣れる必要があった。グラウンドに慣れる必要があった。

**戦術的に劣る日本**

**スロウインも全然ダメ**

写真左からモーター隊長、シムライナー、シムライナー

が、神宮のような古いグラウンドは一流クラブにはないから、あれほど慎重でなくとも良いことになる。われわれのチームも、学生選抜のときとくらべれば、全日本とやったときは、グラウンドに慣れていたから、早く調子を出せたができた。

シムライナー お世辞抜きにい

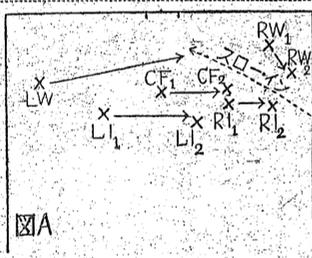
参加して、急に敵が逆襲に移った。スローイン・バックスの三人で敵の守備を崩すという、メンバリの編成方針そのものが間違っているのだ。

堀江 それにしても、オツペン・バックスのウイング・ハーフとインサイドは美に広く動きまわった。日本の真中の四人は、WM戦法を探るには弱まるということはないのだから。

**スロウインに就て**

シムライナー そんなことはな

それから、日本チームについてぜひ言っておかねばならないのがスローインだ。これは、技術



的にも、戦術的にも全然ダメだ。技術的には、もっととどろきま

以次寄

### 日本の攻撃と守備

堀江 日本の攻撃は、どうですか。

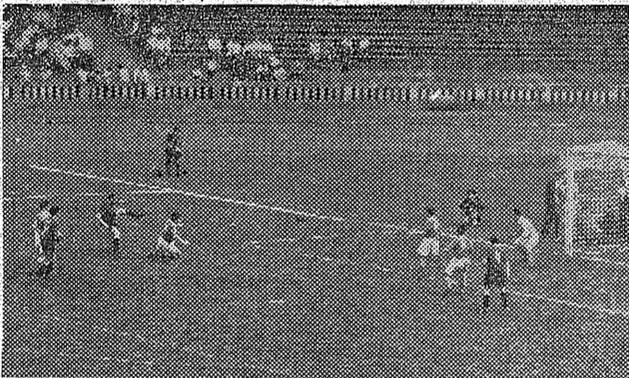
シュライナー 日本チームは、ウィング・ハーフが球を持ったとき動いてやるのは、ウィングがインナーが一人ぐらいなものだ。われわれのチームでは、そのとき原則として、フォワード五人が全部球を動かすように動いてやるし、反対側のウィング・ハーフも動いてやる。パスを出す可能性は六つあるわけだ。ところが根本問題は、堀江 日本の守備は。

シュライナー まず個人個人が敵をカバーするときの考えが間違っている。(ちょうど席上にあつた全日本チームとの試合の写真を示して)ほら、バックがこんなにボールにつられて、マークすべし敵よりボールに近く、ゴールに近い位置にいる。これではいけない。

【写真参照】この場合日本のバックス4番か6番(右から三人、四人目)のいずれか一人は、ドイツの4番シュライナー(右から二人目黒シャツ)の右に出てマークし、その動きに注意してはならない。モロー、バックのマークの原則は、常に敵とゴールとの間に位置をとれ。そして、ボールとマークすべき敵を視界の内に入れておいてやる。

## キッカーズの三氏に聞く

日本チームと対戦して



シュライナー 敵の方が強いときは、特に守備力を強化する工夫が必要だ。その戦術を三つ話を

第一はダブル・カバーだ。た

るが、反対側のフル・バックだけ、ウィングから離れて、中央寄りに位置するのだ。

シュライナー ウィングからウィングへ大きなクロス・パスが出たついでに、バックになったフォワードが、どこへも、球のあるところへ応援に出かけて、いつも二対二で敵を圧倒するのだ。

そのかわり、フォワードは、ウィングとセンターの三人が前へ出て、逆襲のチャンスをつかむ。インナーは一人で間に合わせるこ

とになる。(図B)

それでも間に合わないときは、二重カンヌキ戦法をとる。つまり、フォワードが二人、バックの応援にもどる。そのうち、一人は守備専門、もう一人は時に応じて、インサイド・フォワードとして攻撃にも参加するというやり方だ。これで敵の得点を食い止めるのは、味方の三人のフォワードは活躍する余地は広いのだから足が早ければ案外一、二点取って、勝

た。

第二は、カンヌキ戦法だ。カンヌキで門を閉めるように敵フォワードを閉めつけてしまふのだ。それは、フォワード五人のうち、一

番守備力のある一人をバックに下

げてしまふのだ。

五人のバックスは、一人一人自分の相手を持っている。これが、敵と球を取合う場合、六人目のバックになったフォワードが、どこへも、球のあるところへ応援に出かけて、いつも二対二で敵を圧倒するのだ。

そのかわり、フォワードは、ウィングとセンターの三人が前へ出て、逆襲のチャンスをつかむ。インナーは一人で間に合わせるこ

とになる。(図B)

それでも間に合わないときは、二重カンヌキ戦法をとる。つまり、フォワードが二人、バックの応援にもどる。そのうち、一人は守備専門、もう一人は時に応じて、インサイド・フォワードとして攻撃にも参加するというやり方だ。これで敵の得点を食い止めるのは、味方の三人のフォワードは活躍する余地は広いのだから足が早ければ案外一、二点取って、勝

た。

第二は、カンヌキ戦法だ。カンヌキで門を閉めるように敵フォワードを閉めつけてしまふのだ。それは、フォワード五人のうち、一

番守備力のある一人をバックに下

げてしまふのだ。

### オ軍の練習法など

堀江 オップエンパスは、バックが上手だが、どんな練習をしていませうか。

シュライナー 八ヶ原の高山の横木から綱を下げて、それにボールをつるしてやるのが基礎練習だ。そのプレーヤーも、片手を

まっすぐあげて、その高さのところにボールをつるしてもいい。この高さで正確にヘッドディングできるように、随時とジャンプを習

うのだ。僕のみるころでは、日

本のプレーヤーは、まっすぐの基礎練習をみっちりやって、一番高いところでヘッドディングすることを学ばなければならぬ。

次に試合中のヘッドディングの練習だが、日本のプレーヤーは、ジャンプのタイミングが悪い。いつも遅すぎる。ボールがどおがあつたあとでどおがあつて来る。ヘッドディングでは、さきにとどまらなければ勝たない。

堀江 日本の審判はどうですか。

モロー 三つの試合の審判を

くらべると、関学の試合のレ

フェリーが一番良かった。一番悪かったのは、全日本のときの審判

振りだつたと思う。フアウル・チャージをもう少し取る必要があつたし、アドヴァンティジ・ルールをもっと活用すべきだ。

あの試合でライト・バックのインナーがわざわざハンドをして防ぼうと思つた球が、彼の手をかすつただけで、日本のレフト・ウィング(加納)に渡つた。あのときハンドを取らなかつたのは、

は、

シュライナー なにしろ、あれは三試合とも友好試合だから、お互いに乱暴もしないし、審判は棄だ。リーグ戦やトーナメントといふことになる。審判の仕事はずつとある。

堀江 あなた方のチームは、そんなに動くが、平常の練習量は、

モロー 日曜日には休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

### 球と相手を見て動け

強敵には守備強化の工夫を

アドヴァンティジ・ルールを活用したのが結構だが、あれ以外には、この規則が活用されていなか

った。

シュアナー ラインスマンのことだが、日本の練習はプレーヤーがフアウルをしたと思つて盛んに旗を振るが、ドイツではあんなに盛んに振らない。タッチ・ライ

ンから出たか出ないか、ゴール・キックかコーナー・キックかを指示するだけで、あとはレフェリーから特に求められないから、積極的に意見を表明するということが

はない。

シュライナー なにしろ、あれは三試合とも友好試合だから、お互いに乱暴もしないし、審判は棄だ。リーグ戦やトーナメントといふことになる。審判の仕事はずつとある。

堀江 あなた方のチームは、そんなに動くが、平常の練習量は、

モロー 日曜日には休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

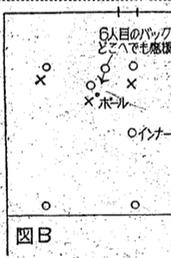
合がある。月曜日は休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ

合がある。月曜日は休んで、フィ



インナー、十八歳やウィリアム・フット・インナー、十九歳のようになすくれた若い選手がよそよそしくね。

シュアナー ドイツ人は、みんなほんとに小さな子供のように球を回っているし、コンビネーション・プレーをやっているから、クラブへ入ってすぐさまに、技術的にも、戦術的にも、かなり上回りができているんです。

堀江 最後に、日本のボールはどうですか。

シュライナー 空気を入れる口のどこを皮ヒモで締めているのが一番いい。おまじに日本では空気を少し詰めるから、ボールが固いのでは皮ヒモのテーパーが余計に気になる。ドイツでは皮ヒモで口を締めるボールは練習にしか使わない。

(注)彼らの持っている試合ボールは、皮ヒモの小さな穴があいていて、そこから空気を詰めるようになっており、皮ヒモは不要である。

なお、座談会を終って立去りさうなシュライナー君は、三ツの審判の成敗が、八月にドイツを訪れる日本学生チームの上に掲げられていることを期待しますよ」といった。(堀江記)

### キーセンと引分け

渡独学生サッカー  
西ドイツ遠征中の日本学生サッカーチームは二日キーセンでキーセン・クラブと対戦、1-1で引分け、日本チームは後半八分にOP木村が一点をあげた。(ロイター特約)

### 学生サッカー敗る

対キッカーズ戦  
ドルトムント国際学生選手権授会に出席のために二十八日、西ドイツのオッフェンバッハに到着した日本学生サッカーチームは一日キッカーズを相手にドイツでの初の試合をオッフェンバッハ(西ドイツ)競技場で行い、観衆二万を前に健闘したが7-2で敗れた。(AFP特約)

### 日本、西独に惜敗

国際学生スポーツ週間は九日ドルトムントで開幕されたが、その日のサッカー試合で日本は西ドイツと対戦、4対3で惜敗した。数名の在独日本人をふくめてスタンドに集まった観衆は二万五千以上であった。

(ロイター特約)

西ドイツ4-3-1-2-3日、本前半25分、日本は小林のシュートで先取点をあげ、西独をリードしたが、西独は前半終了直前の40分、ハンフツカがシュートに成功、1対1で前半を終った。後半に入っても両チームの競り合いがつづき、7分フエバ1がシュートして西独がリードしたのもつかの間、25分には木村が得点して再び同点保持に入った。この間日本のゴール・キーパー村岡は素晴らしい演技を示して西独の攻撃をくい止め観衆の拍手を浴びた。31分西独はクノセルが加点し3対2としたが、40分、日本は木村のシュートが再び成り、三度同点とした。だが42分フエバ1のシュートによって日本はついに惜敗した。西独チームは上背を利し、ヘッドリングによって背の低い日本選手を悩ましたが、日本チームは真摯なチーム・ワークを示したと言える。

【注】参加チームを四グループに分け各組のリーグの勝者がトーナメントを行う。日本はA組で西ドイツとルクセンブルグの三チームでリーグを行うが、この第一戦に敗れたわけ。十一日ルクセンブルグと試合をする予定。

### サッカーは六位

ドルトムントの国際学生スポーツ週間に出席した日本のサッカーチームは十四日の最終順位決定戦でエジプトに敗れ六位となった。(AFP特約)

## 流石に強いユーゴ

### フォーメイションよりトレーニング

大谷 四郎

第三回国際学生スポーツ週間は西独ドルトムントで行われ、八月九日から十六日までの公式スケジュールを終了した。サッカー競技はこれに参加した唯一の共産主義国ユーゴスラヴィアが優勝した。二位はスペイン、三位ドイツ、四位スイス、五位エジプトで日本は六位に甘んじなければならなかった。サッカーは初め十二カ国が参加する予定されていたのが十カ国となり、ブラジル、イタリヤの参加が見られなかったのは惜しかった。十カ国を四グループに分けて予選リーグ戦を行った。三チームのグループが二つと二チームのグループが二つ

で、二チームの組は二回ずつ試合した。そしてドイツ、ユーゴ、スイス、スペインの四チームが予選を通過して決勝トーナメントに臨んだ。敗者同士もそれぞれ順位決定の試合を行って順位をつけたわけだが、スケジュールの都合で、九日の開会式の前日八日から試合は開始され、閉会式の前日十五日までの八日間に四試合をやらねばならなかったのは相当な苦行である。

日本は九日の開会式直後に主競技場で行ったドイツ戦を行い、4-3で敗れた。第二試合は十一日ヘルネ市での対ルクセンブルグ戦でこれには8-2で快勝、第一グループの二位となり、第二グループの二位ザールランドと十二日クラブ・ベック市で対戦、これも7-1で快勝、十四日にポツダム市でエジプトと五位決定戦をやり、3-0で敗れ六位となったのである。

試合は暑さをきけて全部午後六時から行われたがドルトムントの主競技場で行われたのは日本対ドイツ、決勝のユーゴ対スペイン戦だけで他は三時から六時離れた周辺の都市で行われ、三十分から一時間以上もバスでゆられて乗込むために相当な体力を必要とした。夜その町の娯楽にでると宿舎に帰るのは十一時を過ぎてしまうほどだった。

さて決勝トーナメントではユーゴ対ドイツの準決勝とユーゴ対スペインの決勝を見たが、優勝したユーゴはさすがに強かった。ドイツはこれに対してほとんど望みはなかった。日本はドイツには勝つ試合をしたのだが、もしユーゴに對したならば手も足も出なかつたろうと思われ、弾力に富んだ身体、速い走り、細かいステップで操るボール・テクニックのそろっている点では、スペインも及ばなかった。スペインはFWが速く、後半を通じて五分の攻撃を試みたけれども、ユーゴに比べて柔軟性が乏しく、攻撃が一本調子のためユーゴのスリー・バックラインに完全に止められてしまった。ドイツは2-1のスコアで一応接戦のようなが、後半ユーゴが力を落していたので、1点を返したものの力の差は、3、4点は確実にあつた。

スペインは決勝に出ただけでユーゴについて強かった。エジプトは五位になつたけれど、スペインにペナルティ・キックで敗れただけにその力は大会のA級ドイツよりも上で、三位あたりが実力だろう。Aクラス級のサッカーは先ずバネのある身体・自由自在のボール・テクニックを基礎として、とにかくグラウンドの空気をみつけて漫遊して行く。味方から味方へと中盤は球を正確なものに回しペナルティ・エリア近くに食い込み、そこで決定的な動きとパスを組み合わせてシュートしようとするところではパスケットボールに近いものだった。フォーメイションや決ったポジションを定めることは余り考えずに動き回るその動きに相手はまず幻惑される。

日本チームもフォーメイションよりも身体トレーニングとボール扱いを大きくしてから、フォーメイションという順にならなければならぬ。〔筆者は日本サッカーチーム・マネージャー、本社運動部員〕

# 早慶ともに勝つ

## 関東大学サッカー

第三週

関東大学サッカー・リーグ第三週  
 週早大対東大、慶大対明大の二試合は十八日午後一時から行われた。東大、明大はともに先取点をあげ試合は面白くなったが早大、慶大は後半地方を發揮して逆転、ともに快勝した。

早大 3-0 東大  
 東大は例によってOF岡野にボールを集中してその個人技を生かし、中央突破の強攻策を採り、早大は両翼に突進力のある吉田、西本を起用してオフェン政法を採った。

早大 2-0 明大  
 慶大は先取点をあげたが、その後杉野のフツシュを加えて3-1で順当の勝利を収めた。

早大は新人西本、平林をFW線に、中島をGKに起用して気分的な転換を図ったが、チーム全体に好影響をもたらして見違えるばかり勢いづいて鋭く動いたことが勝因であった。ことに負傷にもひるまず奮戦して勝利点をあげた平林の意気は壮とするものであった。

早大は岡野の一点を守り切ろうと十名守備を布いて必死の防衛にこつめたが、所詮体力と技術の相違から、疲労を早めて後半中頃にRWB長井の強パスを左張り新人RW平林（前半負傷してRWになったが、ゴール正面にもぐり込ませて、見事な強シュートでリードを奪った。その後杉野のフツシュを加えて3-1で順当の勝利を収めた。

早大は新人西本、平林をFW線に、中島をGKに起用して気分的な転換を図ったが、チーム全体に好影響をもたらして見違えるばかり勢いづいて鋭く動いたことが勝因であった。ことに負傷にもひるまず奮戦して勝利点をあげた平林の意気は壮とするものであった。

# 中大、明大に辛勝

## 関東大学サッカー 立大は教大と引分け

関東大学サッカー・リーグ第四週、中大対明大、立大対教大の二試合は十八日午後一時から神宮競技場で進行、明大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

中大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

中大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。



中大が前半初めに明大の守備の攻撃に、やむを得ず出したのは許せるとしても、徐々に地方を出し始めた10分過ぎからの攻撃が、はるばる調子で、伸縮自在のふくみのあるものは見られず、たゞ体力で押し込んでいるという感じがなかつた。決定力はなく25分すぎにI長沼がフリー・シュートした一点にとどまったのは、気を抜いていたとしか考えられない。

しかも後半はなお悪かった。果敢な明大FWにかきまわされ、9分LW新井に決められ、ほとんど

後半全部を押し続けられたのは、ますますこの感を深くする。得点こそ7分、22分RWの吉原が決めた二点と増えただけでも、中盤における出足の悪さは昨年度二位の中大の片鱗すらも見られなかつた。中大にもう少しの迫力ある元気がプレーを阻むたい。ただ中大OH李の広範な動きは注目し、わずかにその面目を保っている。

この作戦の失敗が立大の攻撃を線香花火に終わらせ、かえって後半の終りに教大の縦パス戦法が成功し、比較的弱い立大バックスをしばしば破り、得点機を教大に多く与える結果となった。しかし教大とても決定力が弱く、ゴール前でボールをキープしたものの以外のフオーが悪かった。教大は後半の致度の得点機、10分ゴール前からの混戦でのCF深沢のシュートが

はすれ、また17分左に深く入った福原の好センター・リングと40分から用いた縦パス戦法から生まれ、たCF深沢の独走のチャンスが早く、好試合であったが、決定球もなく、迫力のない期待はずれの凡戦。(中条 一雄)

立大 0-0 教大  
 立大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

立大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

立大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

立大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

立大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。

立大は先週の対慶大戦と見違えるほどの元気をみせたが惜しくも敗れ、立大対教大戦はこの勝負が直接優勝に關係するだけにさかざる慎重で、結局得点なく引分けに終わった。





今年度日本スポーツ界をにぎわした外国チームの殿としてスウェーデンの花形サッカー・チームのユールゴルデンが日本蹴球協会の招きで来る十九日CAT機で香港から来日、十二日間滞在して次のように三試合を行う。

二十一日 対各日本 (大阪球場)  
二十五日 対各開東 (場所未定)  
二十九日 対各日本 (神宮)  
ユールゴルデンは七日ストックホルムを出発、香港、日本で試合後さらにサイゴン、ハノイなどアジア各地を遠征する。

ユールゴルデンはストックホルムにあるスポーツ・クラブで、その設立は一八九二年三月、スウェーデンのスポーツ・クラブ中では古い。クラブは現在千五百人の会員を有し、サッカーのほかバドミントン、卓球、ボウリング、ボクシング、レスリング、カヌー、陸上、ハンドボール、アイスホッケー、スキー、クロスカントリースキーの部門があり、クラブ選手やチームとしてスウェーデン選手権を獲得した数は二百五十に上っている。

# ユールゴルデン 来日

## スウェーデンの花形サッカー・チーム

クラブから出た名選手は少なくないが、特に世界ホクシング・ヘビー級三位置を占めたタンデルベルグ、百三十九歳、跳丸で世界スキー・ジャンプ記録をつかったタン・ネツヴェル、ナポリのプロ・フットボール・クラブへ世界最高額の十九万ドル(約七千六百万円)で買われたヘッゼ・エッソンなどが有名。

サッカーは一九〇〇年から二十年間上位置を占め、一時低調となったが、一九四五年から上昇、最近は一昨年来日したヘルシンクボリリュ、マルメなどと首位争いをつづけてきた。昨シーズンは二位に終わったが、首位マルメには2-1、4-3で二勝しており、シーズン末期の四試合に負傷選手続出で惜しくも王座を逃した。一九五〇年からスウェーデン代表選手に計十四名を出しており、しかも、このうちセンター・フォワードは四人で他クラブをしいている。クラブは今春マルメと対戦した時三万九千六百三十三人というスウェーデンで最高サッカー観衆記録をつくったほど同国で人気がある。

最近の国際試合成績  
一九四八年 アメリカ遠征。勝1  
一九五〇年 極東諸国遠征 14勝0敗。ゴール得点数60-13(このうちナポリのプロ・チームに勝ったエッソンが独りよく34点をきめた)  
一九五二年 イスラエル、トルコ遠征 7勝0敗 対全仏軍 1-0 敗 対リーグ(ベルギー選手権) 2-1 勝  
一九五三年スペイン遠征 対オビエド 3-2 勝 対アトレチコ(スペイン選手権) 1-0 敗(観衆五万五千)  
対マドリッド遠征 4-1 3 敗  
一九五三年 対ウォルバーハンプトン(英) 3-1 勝 対コリンシアン(サンパウロ) 3-3 分 対ウィーン遠征 3-0 勝 対アトレチコ(スペイン選手権) 5-4 敗 対日本学生選抜 9-0 勝 対アジャックス(オランダ選手権) 10-2 勝 対ダイナモ(モスクワ) 3-2 敗(観衆九万人) 対スパルタク(ソ連選手権) 1-1 分(観衆九万五千) 何れもモスクワで。(ソ連に招かれた最初のヨーロッパ・チーム)  
チームは二年前まではクラブ試合のみで知られていたが、今は戦法を委え、いつもボールをコントロールから離さない非常にきれいなショート・パスを用いている。



### 来日チームの顔ぶれ

団長 リーベルグ  
会長 デュネール  
監督 シングヴァルド・ベルグ  
副監督 グンナル・ルンドクイスト  
マネージャー アンデルス・ベルンマル



コーチ デービット・アストレー (44)  
(英人)、現役時代英国のダービー、チャールトン、アストンビラ各チームにインナー、CFとして活躍、ウェールズの国際代表選手たること15回、ウェールズが生んだ名選手の一人。50年以來ユールゴルデンに招へいされ、名選手エッソンの育ての親。ユールゴルデンの前にはイタリアの有名なインターナショナル(ミラノ)やメッス(フランス)にもコーチした。彼の義兄(パートナー・ターナー氏)も有名なチャールトン選手で、今はマルメをコーチしている。



GK アルネ・アルビドソン (24)  
スウェーデン代表チームの名キーパー、カール・スベンソン(ヘルシングボリユ)の後継者と目される新鋭で、代表チームの補欠GK。店員。



GK スヴェン・リンドベルグ (23)  
最近カールスタッド・チームから転移したコンチネンタル・スタイルの名手。店員。



FB カー・ルエリック・アンデルソン (26)  
主将、国際選手、RB、オリンピックには二週間前ヒザをけがして不出場。ヘッディングとタックルに強く、足が速く、よわボクシング・プレーをする。遠征外国数16。



FB オーケ・オルソン (27)  
LB、マルメから今季新参加した優秀プレイヤー。歯科医。



FB スチグ・グスタフソン (23)  
FB陣のホープで左右何れにもよく、スピーディで強タックル、それにキックがよい。店員。



HB ビルゲル・ステンマン (27)  
国際選手、RH、テクニックにすぐれ、トリック・プレーがうまい。身体が柔軟なのでどんな位置でもキックが出来る。シュートがうまくフリー・キックやペナルティ・キックが得意。遠征外国は17の多きになる。公使。



HB パート・イヴェグレン (30)  
国際選手、CH、足が速く、ヘッディングとタックルに強い。遠征外国14。電気技師。



HB シングヴァルド・パールリング (23)  
昨シーズンスウェーデンの最優秀ウイング・ハーフの評を得た選手。円熟したテクニックとエネルギー溢るプレーで鳴る。ドリブルの名手。雨のグラウンドが得意。技師。



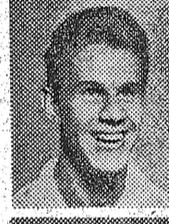
HB ルネ・ウートベルグ (21)  
ウイング・ハーフ。球技うまく、疲れを知らず広範囲のカバーリングをする。将来を期待されている。新人。



FW スチグ・エリグソン (25)  
両ウイダあるいはCF、51年にデビューし好調だったが負傷して休み、カムバックしたところ。頑健な身体で、足速く、スピードに乗って左右何れの足でもシュートする。店員。



FW ハンス・アンデルソン (25)  
花形インナー、国際選手、スウェーデン屈指の頭脳プレイヤー、完全なテクニックを持ち、ユールゴルデン頼みのゴールゲッター。今回は来られなかったスチグと共に双生児の名選手。保険会社員。遠征外国数10。



FW スヴェン・ヨハンソン (22)  
オリンピック選手、CF、スウェーデンサッカー界で一番人気を集めている。他に比べなき優秀なCFで、カナダのプロ・チームから有望されており、エッソンよりも伸びると見られている。左右の足でシュート自由自在、リーグ戦では毎シーズン50から60点あげている。学生。



FW レンナルト・フォルシュベルグ (25)  
LI、小柄だが優秀な技量の持主で、ヘッディングよくシュートも強い。ヨハンソン、アンデルソンに負けないゴールゲッター。スキー・ジャンプの名手でもあり、スウェーデン選手権大会で九位、68歳の記録を持っている。技師。



FW エスタ・サンドベルグ (21)  
LW、国際選手、51年実業団試合で発見された新鋭。よく動き、速く、両足にダイナマイトを抱き国際試合でよく難しいアングルからゴールをきめており代表チームには欠かされない選手。フランスから一万ポンドで、またスペインから一万五千ポンドでプロ入りをするめられたが彼は断った。今回もスペインとハンガリーの国際試合を終え直接チームに参加する。店員。



FW ヨン・エリグソン (24)  
CF或はLI、前国際選手、よく動くヘッディングの名手。対日本学生軍に独りよく5点をかせいだ。店員。



FW ビルゲル・エクルンド (24)  
インナー、頭脳プレイヤー、チャンス・メーカー、シュートもうまい。また将来を期待されている人。店員。



FW ウーラ・エドランド (24)  
ウイング、インナー或はウイングハーフ、優秀なプレイヤーで、モスクワでは対スパルタク戦で見事なゴールをきめた。自信を持たないのが欠点。店員。



FW アルネ・ラルソン (22)  
クラブの少年チームで成長した選手で、50年にクラブのアジア遠征に参加、昨年はスウェーデン代表チームの補欠。

# 早大、中大に完敗

## 関東大学サッカーリーグ東大、明大を破る

関東大学サッカーリーグ東大、明大を破る。対明大、早大対中大の二試合は十四日午後、後援時なら神宮競技場で、早大は健闘よく明大を破り、最下位陥落を免れ、また期待された早大は全く不調で中大に零敗を喫した。

東大 2 (2-1-0) 1 明大  
0 (0-1-1)

石田沼本 見口田本島本

立福原 浅原西中藤

GK B H B F W

クスの早いアタックにつなされ勝ちで物にならず、後半12分R1沼からのパスをIW沼が決めて一点を齎したのみであった。東大は各自がどうしても自己の力でやらなければならないという強い精神力の發揮によって勝利を収めたものであり、明大は球を回しておけば、何時かは、だれかが得点してくれるであろうという消極的な依頼心に流れたために負けたのであった。

中大 4 (3-1-0) 0 早大

林尾村島 村原野沼山

小松三孝 中吉野日長内90001

GK B H B F W

対戦相手	勝	敗	点
立中大	1	1	7
立中慶	3	0	11
立中早	3	1	10
立中東	3	2	12
立中明	2	2	4
立中慶	2	1	4
立中早	2	1	4
立中東	2	1	4
立中明	1	5	0

早大は攻撃にも意気消沈し、全くチャンスなく一方的に押し込まれ、後半に至って一名不足の中大に対して漸く攻撃態勢を採ったが、FWの弱気がたつてシュートまでには至らなかった。28分には中大は逆襲からLI長沼球を得て突進し、OF日比野に縦パスを送ってまさやかに決め4-0で快勝した。中大は寒に堪えたる活躍振りで茅場退場後の七十分間も十名のみで早大を押しまくった力強さは、見事なものだった。全員対敵大戦とは全く別人の如き活気あふれるプレーを演じFWの長沼、日比野の鋭いタツシ、FB三村、DH李の頑強な守備は特に威力のこもったものだったが、先取点の二点の因を作ったLI長沼の奮戦は第一殊勲ともいべきものだった。早大は立上りに右側守備の小田島と長井がもろくも守されたこととがチームに大きな打撃をなすことになった。FWもセンター・ストライカーが弱気で、ボールをキープ出来ず、攻撃のいと口を見出し得なかつた。十名の中大に対しては、無気力というべく、若しチームとしての特徴を置き忘れた感があった。(土藤 孝)

S  
28  
・  
11  
・  
28

# アサヒスポーツ



11月28日号

## 見せた世界一流の強味

### 大阪で日瑞交歓サッカー第一戦

スウェーデンのサッカーチーム、ユールゴールデンは二十二日大阪球場での対全日本戦に世界一流という強力振りを発揮して、5-1で初の試合を飾ったが、この日全日本も健闘、ことにGK渡部は活躍して多くの危機を救った。一写真は後半9分ユールゴールデンがCFヨハンソンに送った高いパスを渡部飛び出てパンチにのがれたところ。右からGK渡部、LB岡田、LH井上、その背後が長身のCFヨハンソン、その左に小さく見えるのはLIフオルシュベルグでその姿勢は機敏な彼が早くも次の動作に移っているのをみせている。 22日・大阪球場にて 岡崎写真部真撮影

世界的な強豪、スウェーデンのサッカーチーム、ユールゴルデンは二十日香濱から空路来日、直ちに阪にきて二十一日大阪球場に特設したサッカー場で全日本選抜チームと初の試合を行った。ユ軍は外国チームには珍しく早くからグラウンドに現

# ユ軍後半に本領発揮 全日本健闘、一点を報う

ユール 5-1-0 全日本  
ゴールデン 4-1-1

(主審 市橋 時蔵氏)

全日本監督が試合前語ったこと

【全日一本】  
全日本監督が試合前語ったこと  
ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

【ユール選手】ユ軍—L—F—オルシ  
ニバルグ、日本—R—日岡村(関守  
出) R—B—山形(関守出)  
注—練習試合では前半の選手交代が認められる慣習があつて、その場合GKは負傷すれば臨時に、その他に二、三名程度ハーフ・バックに替えるのが普通であるが、その数は各チームの希望が尊重される。この試合はGK以外に二名と決められていた。

【交代選手】ユ軍—L—F—オルシ  
ニバルグ、日本—R—日岡村(関守  
出) R—B—山形(関守出)  
注—練習試合では前半の選手交代が認められる慣習があつて、その場合GKは負傷すれば臨時に、その他に二、三名程度ハーフ・バックに替えるのが普通であるが、その数は各チームの希望が尊重される。この試合はGK以外に二名と決められていた。

われて試合前の練習を行う慎重さだったが、前半は全日本の堂々たる健闘にあつて一点に止まったが後半に満ちたプレーで本領をみせ、1-0で快勝した。だが、全日本も前半は正攻法で見事に対抗、後半は速攻の逆襲、貴重な一点を奪った。

ユ軍は相変わらず左右にゆるぎある中長距離のパスで好機を生みかけたが、日本R山形、OH山路の果敢なスライディングなどでよく守り、ユ軍またLWエドランドが鋭いシュートで機を逃して前半を終った。

後半に鋭い圧迫

後半ユ軍はLにフォルシニヤルグを入れ、全日本はRに岡村、Rに山形を入れ、木村、鶴田のポジションを交代させた。川本監督によると、後半はユ軍の強圧を予想して中盤のゆるくりしたキープの策を捨て前に強い木村の突進力による逆襲策に出たので、ユ軍に有利な展開になった。

## ユールは全日本に健闘

### 優れた足技と体力

西独以上の柔軟な身ごなし

種田孝一

難波球場はサッカー場としては欧州や南方のローンに近く及ばないが、芝生が柔らかく、選手は芝生を生かそうとして、速来チームの足技をうかがうには、通りの条件である。然しなおラフな感じで

15分にはOFヨハンソンが左寄りに強引なドリブルで進み、右陣に猛烈なシュートを決め、さらに4分にはLWエドランド、44分にはRエドランドのヘッドキックで突き押し、点を重ねていった。

### 日本一点を返す

逆襲を指揮する日本は16分ごろLW岡田からパスを受けたLW藤原がボールを上げてR山形、アンデルソンの頭上を抜き、絶好の好機を作りかけたが、アンデルソンが故意のハンドで防ぐという不愉快な場面があった。39分また3-0のときつい成功して一点を返した。これはR山形のロングキックがLBの背後につき、RW鶴田が約四十度下りドリブルで中央に送り、これにGKが飛び出すところ、OF木村も飛び込んでボールを一度横にかつさりいざま放ったシュートが無人のゴールに決つたものだった。

### 良かった日本GK

K・アンデルソン主審談

難波球場のグラウンドは芝生あり、固いところがあり、上がりたり、下がったりはなはだしく、またグラウンドが小さ過ぎて非常にやり難かった。それにボールが軽過ぎたのもあって、こゝろの極東遠征中の最悪の出来であった。

全日本は今夏ストックホルムで対戦した学生軍よりはずっとよくやつた。だがフォワードはまた動きが足りない。それとシュートが少くない(注—全日本のシュート数はユールゴルデンの計四十四に対してユールが六であった。賀川、岩谷の両インナーは仲を悪く、激戦したため)

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

ユ軍 一八二・七五・二三歳  
全日本 一六八・六一・二七歳

ユ軍 一八二・七五・二三歳  
全日本 一六八・六一・二七歳

ユ軍 一八二・七五・二三歳  
全日本 一六八・六一・二七歳

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

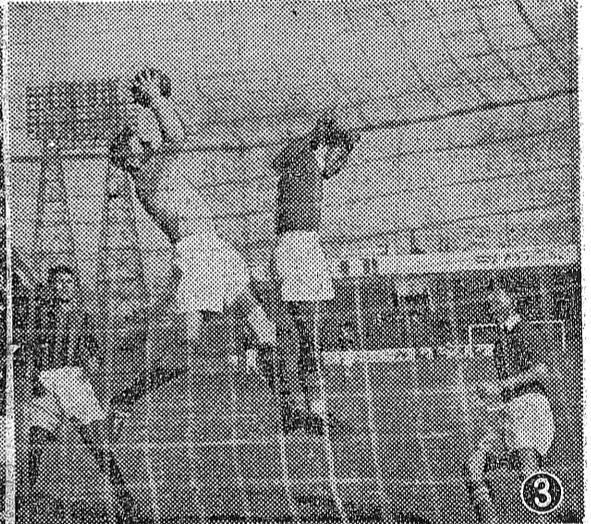
ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

ユールは中盤のキープからFW五人をそろえた正攻法で臨んだが、その策通り前半ははじめて賀川、岩谷の両インナーが互によく働いたコンビでキープ力をみせた。これに対しユ軍はパスの簡単なパスをいれてから大きなクロス・パスを多く用いて攻めた。

# 日本・スウェーデン交歓サッカー

※前ページと関連



写真①ユールゴデン対全日本後半11分、ユールゴデンのシュートを決る。キーパー渡部(1番)②同後半26分、全日本陣ゴール前、ユールゴデンのコーナーキックをゴールキーパー渡部出で防ぐ。③同前半23分、ユールゴデン陣ゴール前、全日本陣LW徳弘、左側からシュートした球を、R W木村ヘッドリングして決めようとしたが成らず。以上22日・大阪球場



# アサヒスポーツ

ASAHI SPORTS

毎週土曜日発行

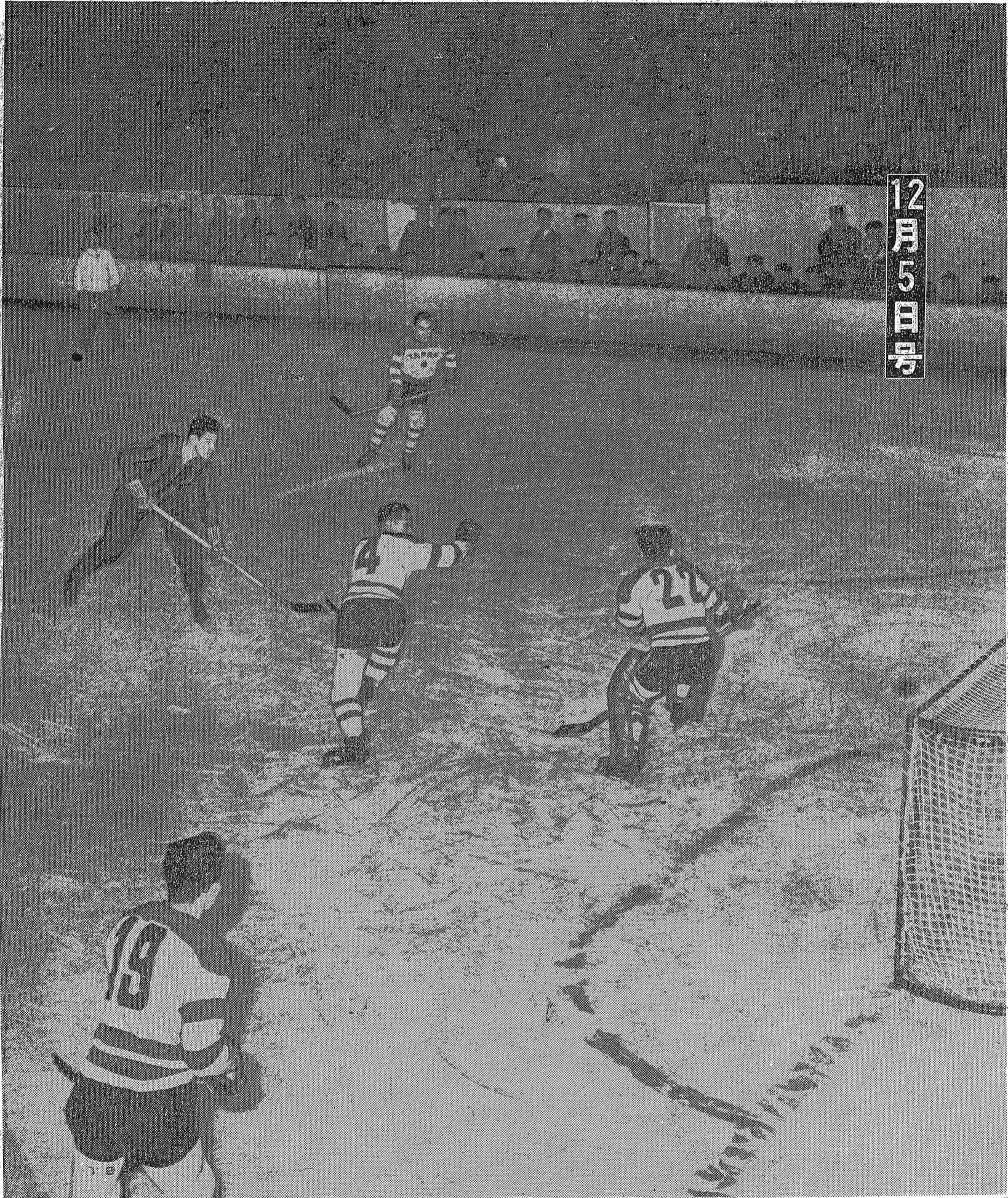
昭和23年1月10日 第三種郵便物認可  
昭和28年12月5日発行 第858号  
編集人 富永正信 発行兼印刷人 春海鎮男

発行所 東京本社 東京都千代田区有楽町2丁目3番地  
大阪本社 大阪市北区中之島3丁目3番地  
朝日新聞 西部本社 小倉市砂津字富野口北380番地ノ1

電話(20)131  
電話(23)131  
電話 2781

定価 15円

S  
28  
・  
12  
・  
5



12月5日号

## 水際立つヨハンソン選手の妙技

ユールゴールデン、アイスホッケーにも完勝

の好プレーをみせて、全日本の精鋭をすぐった選抜軍に完勝したが、日本では欧州のアイスホッケーに接したことがないだけに多くの教訓を残した。一行のスターはヨハンソン選手でオスロー・オリンピックのスウェーデンの代表選手をつとめただけあって、走力もあり、シュートも正確で、素晴らしいプレーヤーであった。写真は第三ピリオド十四分、ヨハンソン選手のシュート成る瞬間(中央左端)後向き19番菊地、4番阿部、22番GK犬野

来日したスウェーデンサッカーチーム、ユールゴールデンは二十七日午後七時三十分から全日本選抜軍との間にアイスホッケー戦を行った。アイスホッケー戦にも本業そこのけ

27日スポーツセンターにて 大川写真部員撮影





スウェーデンの第二回日本サッカー遠征は終わった。二年前のヘルシンギボリユにつづいて、こんどはユールゴランドの試合でヘルシンギボリユのスコアは30、50であったが、ユールゴランドは51、91であった。この結果は何を意味するのかわからない。ヘルシンギボリユは、141のユールゴランドより勝つたのか、或は日本人の目的地がそれならば、日本にとつてどちらがよい結果なのか？



リーベルグ氏

## 進歩した日本のサッカー 欲しい良い球技場

ユールゴランド ヴォルフ・リーベルグ記

つてドリブルに重きを置く相手チームは、日本のフルバックやウィングハーフの健闘に会って容易に得点出来ない。日本のバックスが相手のアタックをクリヤーするのに従来のようにボールをけり流すのではなく、フォワードへと美球していきながら彼等に欠けていることは、相手の次の動きを見逃さないことである。私には彼らが一人のFWが小さなテングルから後方へパスをするという可能性を知らないように思えた。従ってスウェーデン選手の間で多くはバックスの全部が味方ゴールと反対にめくら減法に走

得点力があるが、ディフェンスの方はヘルシンギボリユよりも慎重にかつ熱心にプレーしていない。

私はこれで一九五一年、今夏のストックホルム、そしてこんど三度日本のサッカー選手を見たことになる。そして私はもう一度日本サッカーが多くの点で進歩を遂げているといえる。

日本のサッカー選手は世界一流に成るには余りに小さ過ぎるというものがある。がこれは本当でない。世界で優秀なサッカーの花形選手は非常に身体が小さいのがいる。筆者はまた日本のバックスの頭脳力は非常に高まったといふのは彼らは今やボールにミート(つかむ)すること

ついでにうちにきめられていた。相手へのマークもまたタックリングも進歩したし、また二年前はミスでもなくなつた。

全試合の日本のゴールキーパーは優秀な選手で、東京の全日本のセンターハーフ松永もよかつた。特に松永のヘッドリングは光っていた。フォワードについては著しい進歩を見た。日本のインナーは正しい理解をもつてプレーしている。彼らはテクニックも備え、ドリブルのやりかた、相手をかき出す方法を心得ており、またよくオウンゴールを蹴る。欠点は持ち過ぎである。両ウィングとセンターフォワードは非常に

速いが、ゴール前の肉薄とシュートに夢中になって、最後の決定力に欠けている。彼らはただスピードに寄せることに集中し、はねて、それているボールのことに気がつかず、シュートの大半は空高く上げてしまつてゐる。日本にはよいサッカー・グラウンドがないことは残念だ。こんど各地で試合したようなグラウンドでは、サッカーの高いレベルに到達するのは困難である。各グラウンドは小さ過ぎ、また非常に低級でありスウェーデンではあのようなグラウンドでは選手権試合は決して許可されない。

しかし、私は日本サッカー界の困難を知っており、彼がらすしてこの困難を克服して立派なグラウンドを得るものと確信している。指導者も優秀であり、選手も向上心に燃えているのを知っているから、私は日本のサッカー界の将来が非常に明るいことを疑わない。

私は今や家敵日本訪問の機会を与えてくれた日本蹴球協会を朝日新聞社の御厚意に謝しながら日本を去る。私はこの二者がこんどはわれわれの招待や試合の運営にどんなに骨を折られたかを察することが出来る。だが私は日本が世界の他の多くの国と同様、サッカーで世界のトップに進出する日がくることを信ずる。

そしてグラウンドに大観衆が群がるようになれば、われわれは「われわれが苦心したおかげで、こんなに大きな収穫が得られた」といえるような古いパイオニアの気持ちにひたることが出来る。

本当に有難う。日本のスポーツ界特に日本のサッカーに明るい将来を祈り、共に国は小さいが優秀選手を擁する日本とスウェーデンの選手が常にグラウンドでよい友達として会うことを希望して止まない。

日本の友達と同様に私は、日本および日本スポーツ界方々と共にこの手記を終る

日本はよい準備をする。従

※右ページからつづく

ハンソンが扱けたため決定的に関東バックスを振り切れたが、矢張りグラウンドが狭過ぎたため彼らの活動量を十分發揮出来なかつたことが得点不足の原因と見るのが妥当である。FWが豪華を誇るとの前ぶれだったが、幾分期待外れの感もあつたが、二、三手先まで予期して鋭く動くカンの見さと、これを良く見抜いて正確に渡り続けるパスの出し方は、さすが世界一流チームとしての片鱗を示していた。

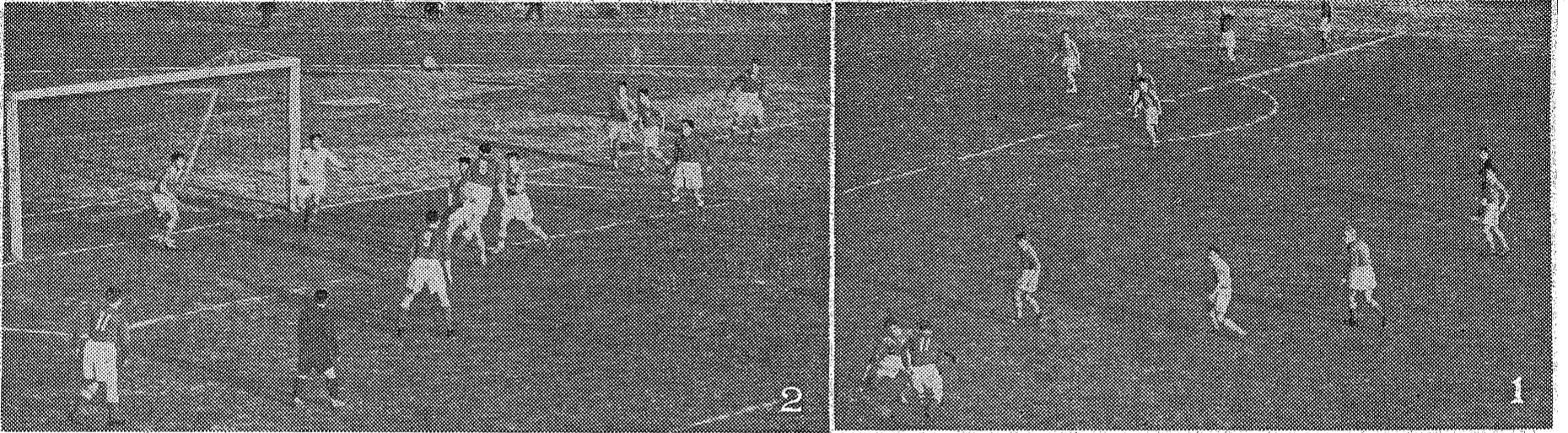
LWエドランドに思切りの悪さがあつて成功しなかつたが、DFエリックソン、LFWホルンバクがあるいはLHバールリングで結合パスワークには角度とスピードに緩急の変化があつて非常に味わうべきものがあつた。殊に後半二度行ったフラインドパスワークの動き方、出し方は日本では見られぬ鋭い妙味があつた。これはLFWホルンバクが非常に非常に優れていたことによるものであり、彼は守つては自陣ペナルティエリア深く入り、攻めてはFWの最前線までタックルして活躍する外、中盤では前後左右の中継役者ともなつて理想的インナープレーを見せてくれた。

バックスはショートパスに弱さもあつたが、アタックの判断が非常に良く、抜かれるを見せかけても決定的穴を開けるようなへまはやらなかつたのは、豊富な試合経験から作り上げられたものである。仲間がカバリングの可能となるまでの持ちこたえやシュートとセンターリングに対する最後のアタックのタイミングは、落つたいた判断力をもって正確にどろろしていた。要所急所を必しと押えつけた威力、体格全体をもってボールを防ぐ勇気は、実に立派な

ものと賞されよう。全関東は100のスコアを出し、通の思う存分の健闘であつた。Wには一、二点の絶対的得点があつたが、シュート力乏しく自身の態であつた。中盤では彼等が回したのがたゞ「球回し」をしたと言つただけで、二軍バックスの陣地を急所をつくような一掃バックが出来なかつたのは惜しまれる。要するにこまが過ぎて一、二度は通るが引き詰りが早く来て、スゲールの大きい外人には最後に至つて不向きであつた。矢張り個人のスピードと強さに格段の相違がある。彼等が利かないから教し方あるまじく、バックスは殊勲の働き振りで彼等の差を気力で補ひ、二軍の差を一点に食い止めた。しかし彼等の一点がGK村岡の明らかな見事な因するものだったから残念な事だと言ふより外はあるまい。村岡もこの一失を除けば十分健闘した。事なプレーを演じ、CH三好は勇敢なタックルの連続によつて巨大エリックソンのシュートをどろどろと阻止してこの日の花形であつた。LBの青木は好位置を保持して地味ながらも最も安定した守備振りを示し、RB土井田は攻撃に際して持前のガツン強さを遺憾なく發揮した。

要するにDFやFWやMFの各々の端緒も二軍の後陣を切り出すまでに至らなかつたが、攻撃の源泉ともなる両サイドバックと両インナーの地方とで、Wに開きがありすぎたので、後半の四つに組む得ない欠陥もあつた。もち論現在のこのスコアを出してもこの四ポジションのインナーは対外的に良しである。従つておりサッカー技術進化の第一問題と見るべきではなかつた。

問題と見るべきではなかつた。



# ユルユルゲームの印象

川本泰三

## 素晴らしいプレーの幅

### 調子づけば凄いで点力

何でも好きな様に……と言っ  
御託言に從って出来上った独語集  
である。

**K君** どうかね、今度のチー  
ムは、ヘルシングポリリユやド  
イツに比べてちょっと落ちるの  
はないかね、大阪での全日本  
のゲームが済んでから、こう言っ  
た意味の質問を幾人ものサッカー  
人やファンから受けたものだ。  
いや、どうでもなさそうだが、  
と、その都度答えては置いたが、実  
のところ内心ではそんな感じがな  
くもなかった。しかし神宮での最  
後の全日本戦を観て矢張り……と  
思い知らされた訳さ……本当に……  
一昨年のヘルシングポリリユは  
初めて欧州の一流にお目にかかっ  
た故もあるが、華麗で大規模なポ  
ジション・チェンジに巧みな浮き  
球を操って、日本を全く子供扱い  
にしたし、また今春のオッペンバ  
ツは除のないパスワーク（これ  
は随分所々で見る角度の三角  
型を構成して絶対に球を渡さ  
ないというやり方）を駆使して我  
我を命に疲れた。ところが  
この前二者に比べるとユルユル  
ゲームには随分分が異なる。

一見馬鹿げてもあるし、くまらパス  
もやる。またトラッピングのミス  
らしきものもあった。F.B.の選  
い布陣（ユ・チームの場合には極端  
で、日本流で行けば中盤でオフ  
サイド・トラップを布いていると  
いった感じだ）とサイドハーフの  
攻撃的役割の重視は、二者の共通点  
だが、それにしては日本は大阪  
と東京を貴重な一歩ずつを報じて  
いる。大阪での得点は完全な逆襲  
態勢（この時はG.F.とF.B.のほ  
んどの心でそんな感じがな  
くもなかった。しかし神宮での最  
だった）東京の一点は、こちらのG  
F.のシュートのミス、キックが偶  
然敵F.B.のミスを生んだという変  
った型からであったが……。また  
ヘルシングポリリユのF.B.マルム  
ストロームのようになり、F.B.でも  
パスでも、どうも如儀なしとい  
ったプレーヤーもいなかった。日  
本の小さいF.W.の連中が何と外  
したり抜いたり出来た様だ。た  
攻め方も別にこれといった特徴  
はないが、早く、大きく球を回し  
て突込んで行く可成り強引なドリ  
ブルもあって、抜ける処は遠慮な  
く抜いて行く、ちよっとした際  
があればどんなシュートを試み  
（左から三人目）が浮いている。

**両軍の陣型** ●ユ軍の攻  
撃：L.W.サンドベルグ（1番）がポ  
ールを持ってR.B.土井田と対して  
いる。O.F.ヨハンソンは図の左に  
外れているが、R.W.アンデルソン  
R.E.エリックソン、L.F.フォルシ  
ユベルグの三人が中央から右に布  
陣して大きなセンターリングを待  
つ陣型である。この三人に対し日  
本はL.B.田村、L.H.大塚  
の二人、しかもL.H.大塚（重って  
いる選手の手前）は相手F.W.ラ  
インから取り残され、有効  
なパスはR.B.土井田一人とい  
形、大きくあげて三人に殺到され  
れば弱い布陣である。6番L.H.ラ  
ン（9番）がL.W.エドランド（11  
番）に素早く渡って、いたら一点を  
失った。

前のヘルシングポリリユやオ  
ツベンバツハみたい、よくよく  
フリーにやらなければならぬ。だか  
ら、彼らはサッカーでもO.F.  
ヨハンソン、彼はサッカーでもO.F.  
だが、彼はサッカーが本職だか  
判らない。カナタのプロから  
判りに来たというだけであって  
抜けておいた。スティック・ワー  
クも、手首を利かせたシュートも  
さることながら、敵に寄り合っ  
て、先んじて場合、バックと敵と  
の間を早く腰を入れて自分をフ  
リーに置こうとした時の身体のコ  
ナシ、移り身の早さは大したもの  
だ。

**氷上ホッケーから**  
K君 僕は全関東とのゲームを  
見ることが出来なかったが、その  
代りいいものを見たよ、それは、  
彼らがスケートの全日本選抜軍と  
やった氷上の一戦だ。  
ボクは見ているに、思ったと思  
う。ボクは若も知っている通り  
サッカーが出来ない男だ。殊  
にアイスホッケーなどはルール  
だ、どうも、知っているに、一つ  
だからボクはボクなりに、一つの  
サッカーとしてこのアイスホッケー  
を観た訳だ、これも残念なが  
ら文句なしに北隊人が強かった。  
妙な事をいってしまったり、笑  
われたりするかも知れないが、日  
本チームはリズムに乗って、た  
んまでその調子で押切るとす  
る。もともとの競技はリズムミカ  
ルなど、その生命も知れないが  
……非常に敏速な動きとスティッ  
ク・ワークを示すが、パスの方向  
や角度が常に一定なので変化に乏  
しい。ところが彼らのプレーを見  
ると突然サイド・ヘッド、大きく  
く、バックを送る。このパスは中  
々通りにくい様に見えるが、要は  
タイミングで敵の動きの逆をつく  
格好になるので、うまく成功すれ  
ば、完全にフリーで攻められる。  
この外フェンスに沿った縦パスも  
通したり、又ポスト・プレーみた  
いなどもある。個人的にもリ  
チが広いので、日本選手には苦勞  
であった。ここにO.F.ヨ  
ハンソン、彼はサッカーでもO.F.  
だが、彼はサッカーが本職だか  
判らない。カナタのプロから  
判りに来たというだけであって  
抜けておいた。スティック・ワー  
クも、手首を利かせたシュートも  
さることながら、敵に寄り合っ  
て、先んじて場合、バックと敵と  
の間を早く腰を入れて自分をフ  
リーに置こうとした時の身体のコ  
ナシ、移り身の早さは大したもの  
だ。

**優れたFW** 日本選手  
のユルユルゲームの時  
よりユルユルゲームは、その巧  
みさ、タツルルに行くと、近寄  
り出るとは、パスをやらせられ、ま  
たこちらとボールの間に身体を入  
れられると、足が効かない。  
R.B.土井田選手、夜間試合の時  
よりユルユルゲームは、その巧  
みさ、タツルルに行くと、近寄  
り出るとは、パスをやらせられ、ま  
たこちらとボールの間に身体を入  
れられると、足が効かない。  
R.B.土井田選手、夜間試合の時  
よりユルユルゲームは、その巧  
みさ、タツルルに行くと、近寄  
り出るとは、パスをやらせられ、ま  
たこちらとボールの間に身体を入  
れられると、足が効かない。

**トランプの相違**  
K君 随分脱線してしまっ  
たが、今度我々がどう戦った  
か振返って見よう。  
戦後なんのなんのといつてもイ  
ンドへ行ったり、またいろんな形  
のチームを招んだりして随分た  
まった。未だに、戦前の水準に  
及ばないんじゃないか、とよくい  
れるが、ボクはそれはともかく進  
歩して来たと思っている。たまた  
まの歩みの遅いこと何と云われて  
も返す言葉がない。  
ユルユルゲームの戦前のチ  
ームを託された時、ボクは自ら考  
えて来た中盤戦の支配を先ず第一  
とする行き方をこの機会に何と  
して主張してみよう、結果から見  
て大きく変わったというこ  
ろ、なにも構わない、とにかく  
こうやらねばならないというこ  
と。

一応の選手になつた人達が、いま  
に基礎が云々といわれるのだ。  
余技もよいだろう。ただ基礎の  
出来上った外国の選手が、バラ  
ンとを意味で投げたり飛んだり  
していることを誤解しては困ると  
思う。球を蹴ること、球を蹴る  
すこと自体にまた十分の時間と根  
気を使ひなければならぬ選手が  
なっている短い時期に大急ぎで物  
にしなければならぬ。だから、  
かねK君。

が、ある程度出来れば、それでも  
満足しよう、あるいは出来るだけ  
得点を少なくして接戦に持つて  
行かねば政策として困るかも知  
れないが、それは我慢して、よ  
その代りうまく行けば、よ  
でも出来るしまた将来への大きな  
踏台にもなるんだという考えだ  
た。

体力技術そして戦術からいって  
も我々より低い点の一つもない相  
手と、四つに組もうというのは  
まよと考ると無理だという気が  
する。しかし中盤戦を対等に立向  
えるものにならなければ全体とい  
う考案方、そのために中盤でF  
Wは何とかがボールをキープす  
る。その場合一人を球を持つた  
いは低く強いパスを通す、高  
い球はハタき落して低く持つて行  
く、一人を球をキープすればタツ  
早い。あのFWが空いている……  
と思つてねらいかけるとどうと  
マークされてしまつた。

が、後半はコ  
ースを抑えら  
れなくな  
た。ウィン  
から切られ  
た。ウィン  
で来るのに気が引かれてしまつた  
からだろう。O.F.ヨハンソンだ  
が、逆のウィンクには歩いて行く  
やり方は正確だと思つた。彼がト  
ランプする瞬間を一気にねらうの  
はかえって危いから、直ぐ抜かれ  
ないようトラップをしたあと、  
その方向を見極めてから行った。  
左から攻めて来ると彼は右へ、右  
から攻めて来ると左を寄つてハッ  
ディングをねらつていたが、彼の  
ヘッドニングには勝つては思え  
なかつた。ユ軍のFWに感じたこ  
と。

クルを蹴ることも多い、三三三に  
一つあるは二回つぎ蹴られても残  
る一本を確かなよいパスで通せば  
よいとまで極言もした。

敵に献上する位ならまださ  
れた方がよい、そうして味方のチ  
イフェンス陣に若干の余裕をあた  
え、したがってサイドハーフに攻  
撃的なポジションを与えること  
も出来る、ただこの際のパスは、  
従来の慣習的なインナー同士の電  
光型のシグザグは極力さけて、縦  
にO.F.或は両ウィンクへ強く低  
く通し、前の三人はここで突込んで  
しまわずに横に動き合つてキー  
し、両インナーがそのラインに達  
し、更につき抜けたり空いた位置  
を抜けるべく、次の変化を生  
むという訳だ、ここで白状する  
と、ボクがやろうとしたことは実  
はこれまでであつて、これか  
の肝心のゴールへの道をまちと  
かについては具体的にはなかつ  
た。ただFW五人が前で動きをい  
した時、ポジションのとり方を  
来るだけにと、出来るだけ横に  
という動きの変化が、何かを生み  
はしないかという希望があつた  
けなだ。

**十分の一秒の優越**  
さて、K君、では実際どうであ  
つたかという、前半は中々よ  
つたが簡単に言つてしまふはそ  
れだが、約束したやり方を  
と、何よりも力のプレーで、そ  
実さまでこれまでの外來チームの  
すれより優つていたと思つた。

R.B.土井田選手、夜間試合の時  
よりユルユルゲームは、その巧  
みさ、タツルルに行くと、近寄  
り出るとは、パスをやらせられ、ま  
たこちらとボールの間に身体を入  
れられると、足が効かない。

L.W.エドランド  
が球を持  
て止めて  
たのでやり易かつた。しかしこ  
どのL.W.サンドベルグは動きな  
らの処理が巧いので弱つた。近  
こうとする出鼻をはたかれてしま  
つた。FWのオッフエンバツハの  
方が堅実なように思えたが、よく  
動くこと、つがしの強いつがこ  
のFWがヘルシングポリリユやオ  
ツベンバツハ以上だ。ヨハン  
ンなんて完全な身体を入れ、勝  
たと思つても足は三、四寸向う  
先に出ている。

# 関東大学サッカー終る

## 教大28年振りの優勝

### 明大、気力なくして完敗

関東大学サッカーリーグは六日十時半から神宮競技場で行われた教大対明大、早大対立大、慶大対中大の三試合でその幕を閉じた。教大はこの日明大を楽に降し、前身の東京高師が大正十四年に優勝して以来二十八年ぶりに優勝した。二位は慶大の後半の反撃をくい止めて3-2で辛勝した中大、三位は後半の猛攻で早大に大勝した立大となった。

【評】 教大はバックスの守備と離した。明大は前半11分1-1精鋭6-2で教大の快勝となり大正十四年以來廿八年振りに優勝を奪得した。

【評】 慶大はバックスの守備と離した。明大は前半11分1-1精鋭6-2で教大の快勝となり大正十四年以來廿八年振りに優勝を奪得した。

## 早大、Cクラスへ

片寄り過ぎて立大RW横森を余りにフリーにした不手際で起因するものだが、敗戦に反発力を見せた早大は、改訂された順位表にCクラスに落ちた。

### 中大、慶を降す

中大は3-2で慶大を降す。慶大はバックスの守備と離した。明大は前半11分1-1精鋭6-2で教大の快勝となり大正十四年以來廿八年振りに優勝を奪得した。

【評】 慶大はバックスの守備と離した。明大は前半11分1-1精鋭6-2で教大の快勝となり大正十四年以來廿八年振りに優勝を奪得した。

※ ページのつづき

うとし、また可成りの程度までやうてのけたことも事実で、この点戦術的に可成り進歩したといふことが出来ると思ふ。岩谷、齋川の両インナーが好調で、盛んにボールを引出したところでは良かったが、縦パスを通すことが出来ず（これは前の三人にも半分の責任がある）そのままでドリブルで進み、という型が多かつたため、それからの展進に変化が求められなかつたと言つた感じだつた。

御承知の通り、長さ一〇〇センチ幅七〇センチという広いスペースの中で戦われる競技ながら、実際のチーム力を規定し、個人々々の力を差異付けるものは、十分の一秒のスピードと一時の動きの幅なんだ。と簡単に言つても、十分の一秒と言つても百回ランチャーなら十に近い距離で走り、また一時の動きの差と言つても、それだけの差でタックルに引つかつたり、抜かれたりもする。サッカーの場合、同時にスタートしなかつてもよい、敵より先へ動けばよいわけだ、そこに妙味がある。同時にこちらが十分の一秒を優越し一時の幅を開けた場合、その優位を保ち、更にそれを拡大して行くことが出来れば、大先鋒竹腰さん、平島さんの「優位理論」の如く、いわゆる逆を取つプレーが生れて来る訳なんだ。

が、実際はこのゲームでも再三ならず動いたと言つたチャンスに優位を自らつくり出してしまつたをやつたんだ。それはトラップの拙さで、守備陣はさうでもなかつたと言つて、現在の日本のFは型にとらわれて、個人々々の動きがすっかり固定している。そのためゴール前で一人が抜かれるともうダメだといふことになる。このことは二年前のヘルシンボリリユの時でも懸念で、今度の場合は大体ペナルティエリアに入つたら対人防衛から理屈防衛へ切替へ行く、もち論完全な切り換えがなく、ヘルシンボリリユみたいに、思ひ切つたボジションチェンジをやられると、かえつて大穴をあけることになるかも知れないが、とにかく球と敵の動きをよく見て一人が抜かれた場合、すぐフリーにさせない位の妨害をする程度のことには要求した。

前にも言った通り、前半RWが大体四分通りに中盤戦を極めたため陣型を直すだけの余裕が出来たのと、グラウンドがやや狭かつた（グラウンドの長さが五幅幅が後二幅広かつたらどうは行かなかつたら）ことなんかにも助けられてよく守つて呉れた。入れられた五五五五、いわゆる穴をあけられたという得点がなかつたことからも見ても善戦と言えらる。

ただ先に言つた様に、一時の幅を取返す、あるいは優越すると言つた方向、具体的にいへば、自己の動きの幅、タックルの距離の限界をよく心得、常に自分の勢力範囲内で敵に対すると言つた考えで動きに更に徹することが、一番大切なことだと思ふ。

【日本に良い指針】 K君 クダクダとならべてきた紙面をオーバーしてしまつたので、一番ゆつくり観た全日本との最終ゲームについて書けなくなつてしまつたが、全日本もよくやつたと言つて、一対一と緊迫した状況を盛りあげた辺りはよくつたが、最後の十分に彼と我との差をうまく現わしてしまつた。

K君 このゲームを見ていて、ボクは何度か胸の痛むのを感じた。それは、入れられた九点に対してではない。再びいつか日本のFWのトラッピングの拙劣を見ただけだ。自分もフリー、前にも敵はいない、それにも拘らず何故あんなにバックして持ち直さねばならぬのか、敵がおろかなら、球をわざと止める必要はないのではないか。

大阪でのゲームでユールゴルトの三番目、CFヨハンソンが低い縦パスを迎えるにもどろどろと見せてそのまま球と一緒に日本の守備線まで抜けて、左足で右隅へクリーン・シュートしたあの下ジグ・プレー、あそこまでは出来なかつても、あれを見ればトラッピングとは何であるかが判るのだ。

チーム	勝	分	敗
早大	10	0	0
立大	5	4	2
中大	5	4	2
慶大	5	4	2
明大	0	1	3
東大	1	1	3
京大	4	5	6

チーム	勝	分	敗
早大	10	0	0
立大	5	4	2
中大	5	4	2
慶大	5	4	2
明大	0	1	3
東大	1	1	3
京大	4	5	6

チーム	勝	分	敗
早大	10	0	0
立大	5	4	2
中大	5	4	2
慶大	5	4	2
明大	0	1	3
東大	1	1	3
京大	4	5	6



